

「これが、國の爲めとか、百姓の爲めとかに引く水なら、成程、寺を移しもしやう。この身一人の慰みに、人を煩はす法はない。」と、斷然、工事を中止させた。

或ひは、貴族として、或ひは、富豪として、官吏として、先輩として、兄長として、主人として、人の上に立ち、人の上に、權勢、權力を有する者の通弊とする所は、その權勢、その權力を妄用して、己れの私心を遂げんとし、爲めに、人を苦しめることをさへ辭しないに在る。桀紂は、暴虐の主と稱せられる。人の上に立つ者には、大概、桀紂流の所がある。畢竟、權勢の何たり、權力の何たるやを知らないのである。

權勢——それは、私情を遂げる爲めの用具ではない。權力——それは、私慾を張る爲めの器械ではない、人が、人の上に？權勢、勢力を有するのは、人の爲めに、消極的には、その安寧を保持し、積極的には、その幸福を増進するの便宜を有するのである。縦し、その志があつても、衆人の身としては、何事も施しかねる。たゞ、人の上に、權勢、勢力の便宜を有する者のみが、人の爲めに計つて

能く、縱横自在なるを得るのである。

權勢、勢力の意味は、宜しく、斯くの如くに解釋すべきである。
徳川家康は、「これが、國の爲めとか、百姓の爲めとかに引く水なら、成程、寺を移しもしやう。」といった。これ、權勢の意義を正解し、これを有する、人の爲めに計るの便宜を有するに外ならぬことを知つてゐたのである。「この身一人の慰みに、人を煩はす法はない」といつた。これ、權力の、決して、私情を遂げる爲めの用器でないことを知つてゐたのである。人の上に立つ者は、この心得がなくてはならぬ。

二の二二 惺窩と山城

◇連かならんを欲すること無かれ。「孔子」

直江山城守兼續は、東國に歸る時、大儒藤原惺窩に逢つて、「廢れた家を、急に、取り立てる時、人臣の心得は如何？」と問うた。當時、兼

續の主人上杉景勝には、石田三成と、東西、相應じて、兵を擧げ、徳川家康を除く計畫があつた。兼續、實に、その謀主であつたのである。夙に、兼續主従の意圖を看破してゐた惺窩は、
「事を速かにすれば、却つて、失敗の因でござる。」とのみ、復た、多くを語らなかつた。

が、後ち、人に語つて、

『山城は、主人に勸めて、旗を揚げさせ、結局、家を滅すであらう。』といつたが、この豫言は、略ほ、的中した。

巧遅は、拙速に如かず。

といふが、それも、事柄による。小事ならば、いざ知らず、拙速主義は、大事を成す所以ではない。

曾我兄弟は、親の敵を討つのに、十八年を要したといふ。赤穂義士も、元禄十四年三四月の交から、翌十五年十二月迄、約二年を費して、漸く、本望を遂げた

況んや、直江山城の企ては、徳川氏を倒すに在つて、その事たる、より以上の大事たるに於てをやである。

「速かならんこと欲する無かれ。」といつた孔子は、又た、

暴虎憑河、死して悔いなき者は、吾れ、與せず。必らずや、事に臨んで懼れ謀ごとを好んで、成さん者なり。

といつた。智者山城の事は、殆んど、暴虎憑河に近かつた。彼れをして、今少しく、事に臨んで懼れしめたならば、彼あした失敗はなかつたであらう。

二の二三 落した皿

◇光る物、皆、黄金なるに非ず。「英國俚諺」

船に乗つて、海を渡る途中、銀の皿を、水の中へ取り落した男、港の宿屋で、一夜を明し、翌朝、窓を開けると、大きな河が、つひ、眼の下を流れてゐる。何

を思つたか、いきなり、それへ飛び込んで、浮いては沈み、沈んでは浮き、何の事はない、鵜の藝當!

驚いたのは、宿屋の亭主で、

「貴方、この寒いのに、水泳ですかね?」

「否々、銀の皿を落したんでね。」

「それは大變! して、目つかりましたか。」

「目つからない。困つた。」と悄氣るのを見た亭主、

「お氣の毒です。何の邊へお落しでした? そして、何時の事です?」

「昨日、海を渡る時によ。」

「海ですつて? 海へ落したものを、河でお捜がしですか。そりや、駄目ですか。」と呆れ返ると、男は、尙も、合點せず、

「でも、水の色が、似てるぢやないか。」

「光る物、皆、黄金なるに非ず。」——黄金は光る。けれど、光る物、必らずしも

黄金ではない。黄金に似た真鍮もある。人造金もある。金鍍金もある。鉛も、鐵も、磨けば光る。

玻璃も、瑠璃も、照らせば光る。

といふ諺もある。單に、光るといふことを理由に、その黄金なることを斷定すれば、大部分は、中らない。

世には、似て非なるものが多い。政治家に似て非なる政治屋もあれば、官吏に似て非なる官金泥坊もある。貴婦人に似て非なる萬引女もあれば、慈善家に似て非なる慈善業者もある。

又た、温順に似て非なる因循もあれば、勇氣に似て非なる猛暴もある。沈着に似て非なる愚圖もあれば、忍耐に似て非なる無神経もある。節儉に似て非なる吝嗇もあれば、無慾に似て非なる濫費もある。無我に似て非なる自暴自棄もあれば、無心に似て非なる無頓着もある。信仰に似て非なる迷信もあれば、主義に似て非なる頑固もある。果斷に似て非なる無分別もあれば、理想に似て非なる空想もある。數へ來れば、限りがない。

であるから、單に、似た事を理由に、事を斷定してかゝれば、眞鍮 黄金と見誤まり海へ落した皿を、河で捜すの失敗がある。事に精神修養に従ふ者は、この點、特に、注意を要する。

二の二四 人を救ふこと

◇只だ、志のなきを恥ぢて、財の足らざるに言を寄すべからず。「貝原益軒」

「世の中に、同じく人と生れて、飢ゑ凍えんとする人、亦た多し、其の不幸、憐れむべし。我が身、餘財あらば、かゝる貧人は、施しすくひて、自らも樂しみ、人をも樂しましむべし。人間の世の樂みは、自ら、善を樂しみ、人を救ひて、善をするに超えたる樂みはなし、驕りて、益なき事に財を多く費すは、浮氣のなすわざ、甚はだ惜しむべし、能く思ひて、樂みにあらざる事を知るべし。富める人の、驕りて、一日一事に費せる財を用ひなば、千萬人の飢を助くるにも、尙ほ、

餘りあるべし。然れば、百人の飢ゑを救へば、財を多く費さずして、救ひ易く、其の益、大なり。此を以て、大富人ならざれども、仁心だにあらば、眼前に人の飢ゑ凍えぬるを、助くるほどの惠みは、行ひやすかるべし、況んや、富貴、高祿の人は、多く、人の飢ゑを助くること、最も易きことになん侍る。只だ志のなきを恥ぢて、財の足らざるに言を寄すべからず。(貝原益軒)

「慈善も結構、博愛も結構。如何せん、吾輩には金がない。五萬や十萬の身上では、仕方がないぢやないか。切めて、岩崎、三井の半分もあつたら、大に、貧乏人を救つてやるんだがなあ。」などと残念顔をし、相變らず、蓄財に餘念のない人に薦めたいのは、貝原益軒の一語である。曰く、「只だ、志のなきを恥ぢて、財の足らざるに言を寄すべからず。」と。

人を救ひ得ると、否とは、志に在つて、金にはない。志があるならば、五萬、十萬の金は、優に、慈善を行ふに足る。その半分でもよい、十分の一でもよい。人を救ひ得ないのは、金がないのではなくて、志がないのである。

噴水の高さは、水源の高さに依つて制限される。人の行爲は、人格の高卑如何に依て決定される。「如何に爲すか」は、「如何に在るか」の結果である。人格の高い人にして、初めて、慈善、博愛などいふ、高い行ひがあり得る。利己一偏の下司共が、縦ひ、百千萬兩の金を溜めた所で、世の爲め、人の爲めに、一金は愚か舌を出すことも出来ないであらう。

二の二五 秀康お國の舞を見る

◇君子は、義に喩り、小人は、利に喩る。「孔子」

結城秀康は、徳川家康の子である。或る時、山城伏見に在つて、出雲のお國の舞を見た。人も知る、お國は、我が國女歌舞伎の開祖で、やがて、演劇の開祖である。

時に、お國は、襟に水晶の珠數をかけてゐた。秀康は、つくづく見て、

「不似合ぢや」と笑ひ、珊瑚の珠數を取らせ。

やがて、お國の舞は始まつた。長袖、風に流々翻り、輕羅、雲と擬ひ、差す手、引く手の面白さには、見る者、恍然たらぬはない中に、秀康は、何を思つたのか、頻りに、涙を流した。近侍の者は、合點が行かぬ。

「何うなされました？」不審顔に尋ねると、秀康は、慨然として、

「彼れお國とやは、女ながらも、天下第一の名がある。自分は、男子ぢや。然るに、天下第一といはれることが出来ぬのは、これ、女にも劣るのぢや。自分の腑甲斐なさ！それを思へば、泣かずにをられぬ。」と、復も、落涙數行に及んだ。

野に生へた一本の檜である。畫家は、その枝振りの面白さに感心するであらう。大工は、

「これを柱に、家を建てたら……」と思ふであらう。金持ちは、買ひ取つて、庭の風致を添へることを欲するであらう。如何に見るかは、人による。

同じ一碗の水飴である。柳下惠は、以て、根氣を養ひ、學問の助けとした。盜跖は、以て、戸樞に塗り、盜みの助けとした。亦た、人毎に、着眼の點を異にするのである。

小野道風が、池の蛙を見て、發奮した話は、誰れも知る。演劇、活動寫眞、講談、小説、何でも、かでも、見やう、聞きやう、讀みやうによつて、爲めにもなり、不爲めにもなる。害と益とは、これに對する此方の態度の如何に在つて、相手の物には關はらない。而も、如何に見るか、如何の態度を取るかは、人によるのである。

「君子は、義に喻り、小人は。利に喻る。」——勇者結城秀康は、阿國歌舞伎を見て、勇に喻つた。

我々は、何物を見、何事を聞くにも、これを有利に見、有益に聞くやう、常々心がけなければならぬ、斯くの如くならば、世間、致る處に、精神修養の好資料を發見し得るであらう。

二の二六 如水三成の前途を卜す

◆ 志満つれば、九族、乃はち離る。「書經」

俄然、太閤の病氣が重つて、朝鮮出征中の諸軍を引き揚げるとなると、人々は、「この使者には、徳川殿が行かれるのであらう。すれば、日本も、自然、徳川殿の手に歸するのぢや。」と噂したが、見込みは違つて、石田三成が、使者を命ぜられた。何れも、案外の思ひをしながら、

「さては、治部が、日本の權威を握るのか。」
といひ觸らした。

その間に在つて、黒田如水のみは、
「否、三成が行くからこそ、日本は、徳川殿のものになるのぢや。三成は、今後心が驕つて、人に妬まれるに相違はない。ぢやによつて、天下は、徳川殿の徳に

靡なびいて、やがて、その掌中しやうちゆうに收せままるであらう。』といつたが、果然くわいぜん、その通りであつた。

權勢けんせいに阿附あふし、富貴ふうきに諛着ゆちやくするのは、小人せうじんの常つねである。文選もんぜんに、

富貴ふうきなれば、他人たにんも合あひ、貧賤ひんせんなれば、親戚しんせきも離はなる。

といへる、これ、一般はんの人情にんじやうである。

が、それには、條件てうけんがつく。權勢けんせい、富貴ふうきの身みを以もつてして、尙なほ且かつ、謙遜けんそんでなければならぬ。權勢けんせいを擁ようするが爲ために、意い、驕おごり、富貴ふうきを有いうするが爲ために、志こころざし満みつるやうならば、忽たちまち、他人たにんの憎惡あうそを受け、怨望まんぼうを蒙かぶり、その至いたる所ところ、一身しん、一家かの破滅はめつを招まねく。書經しよきやうに曰いはく、

志こころざし満みつれば、九族きゅうしやく、乃すなはち離はなる。

と。九族きゅうしやくすらが、離はなれてしまふ。況いんや、他人たにんに於おてをや、である。

然しかるに、權勢けんせいに傲慢がうまんは、附つきものである。富貴ふうきに驕傲けうがうは、附つきものである。獨ど逸いつの諺ことわざに、

富とみは、傲慢がうまんを生しじ、貧ひんは、謙遜けんそんを産うむ。といふもの、まことに然しかりである。

であるから、權勢けんせい、富貴ふうきの人ひとにして、永ながく、その權勢けんせい、富貴ふうきを保たもたんとすれば謙遜けんそんの心こころがけ、これ、專一せんいちである。謙遜けんそん、以もつて、權勢けんせいを守まもり、謙遜けんそん、以もつて、富貴ふうきを守まもり、謙遜けんそん、以もつて、聰明そうめいを守まもり、謙遜けんそん、以もつて、勇力ゆうりきを守まもり、謙遜けんそん、以もつて、學識がくしきを守まもり、謙遜けんそん、以もつて、藝能げいのうを守まもる。斯かくの如ごとくであるならば、人ひとは、喜よろこんで、その人ひとを推戴すゐたいし、甘あまんじて、その配下はいかに立たつであらう。權勢けんせい、富貴ふうきの人ひとの保身ほしんの要道えうだうは、こゝに在ある。

二の二七 九百里の馬

◇予よの依頼いらいすべき唯一ゆいの朋友はうゆうは、予よなり。「テレンス」

關公くわんこうといふ人ひと、赤毛あかひげの驢馬ろばに乗のつて旅たびに出でた。毎日まいにち、千里せんりづ、走はしるといふ、恐おそろしい驢馬ろばであつたが、お供ともの周倉しゆうさう、これが又またた、足あしの速はやい男おとこで、一歩いっへと雖なも、

遅れなかつた。

けれど、關公は、氣の毒に思つて、良い馬を求め、周倉に與へやうと、百方、尋ねたけれど、到底、千里の馬はない。漸く、九百里の馬があつたので、金を吝まらず買ひ取つて、周倉の乗料とした。

成程、良い馬ではあつたが、千里の馬に比べると、一日に百里遅れ、二日に二百里遅れる勘定。周倉は、驚いて、

『折角、馬を頂戴したが、これに乗つて行つたのでは、今に、主人を見失つてしまふだらう。』と、早速、馬から飛び下りたが、さて、馬を見棄てるにも忍びない。馬の四足を繩でしばり、刀の先に引つけて、肩にかついで、章駄天走り！

文明時代の交通機關には、汽車があり、汽船があり、電車があり、自動車があり、飛行機があり、飛行船があつて、その速さ、便利さは、さてをき、關公の千里の馬にも劣らない。

が、然うした便利な機械が、一朝、先頃のやうな、大地震、大火事に見舞はれ

ると、忽ち、駄目になつてしまふ。従來、それに頼つてゐた人は、大間違つき間誤つた揚句、結局、親譲りの自分の足に依つて、えつちら、おつちら、箱根山をも越さなければならぬ。

して見ると、眞に強いものは、自分の力である。眞に頼るべきものは、生れながらの足である。

我々文明人は、餘りに、機械に頼り過ぎてゐる。機械の、存外脆いものであることを知り、自分の手、自分の足に頼る習慣をつけ、練習を積むならば、再び先頃のやうな大變事が起つて來ても、然迄、驚かずに済むであらう。千里の馬に乗る關公よりも、自分の足で走る周倉の方が、どんなに安全だか解らない。

二の二八 抑の一字

◇何事も、程々にせよ、草の葉の、露も重きに落つるなり。「古歌」

「飲食も、なるべきだけは、薄くすべし。房室も、なるべきだけは、少くすべ

し。是れ、身を全うするの法なり、衣服も、なるべきだけは、質素なるべし。器用もなるべきだけは、儉朴なるべし。宮室も、なるべきだけは、卑陋なるべし。是れ、家を守るの法なり。奢侈の念を抑へ制すると、放縱の欲を抑へ制すると、天下、國家を治むる人も、一身を守る者も、抑の一字、至近、切要の學なり。(太田錦城)

孔子の語にも、

約を以てこれを失ふ者は鮮し。

とあつて、己れの嗜慾を抑制し、衣食、住の事は勿論、言語、行爲、すべて、これを約まやかにすれば、世に處して、失敗はあるまい。

三の一日根野返金を斥く

◇朋友を失ふの法は、これに金を貸すに在り。「英國俚諺」

日根備中守は、使者として、朝鮮へ行く時、黒田如水から若干の銀を借りた。歸つて、それを返しに行くと、如水は、近習の士に、

「先刻、到來の鯛を、三つに切つて、その一片を出すやうに。」と命じた。備中守は、先づ、その吝嗇に驚いた。

やがて食事も済むと、備中守は、借用の銀百枚を取り出して返さうとした。如水は、かぶりを掉つて、

「初めから、返されやうなど、存じ申さぬ。たゞ、朝鮮へお立ちとのことに、些か、錢別の心組で、進ぜた迄ぢや。」とい



つて、固く、その返戻を受けなかつた。備中守、今度は、如水の無慾に驚いた。

シエツクスピアは、

貸す人となる勿れ。借る人となる勿れ。

と戒めてゐる。金を貸したが爲めに、昨の朋友、今の仇敵となるやうな例がある。金を貸すこと、成程、考へものであるかも知れぬ。

が、それは、貸し人の心がけが悪いのである。

困窮した一門、失敗した朋友などに請はれて、金を貸すのは、利益があつてではあるまい。親切からの事であらう、その親切を徹底的にして、借り人が、約束通り、返さなくても、

「返しに來ない所を見ると、まだ、恢復しないのだらう。金が不足なのか知ら？都合さへつけば、今少し、用立てやりたいものだ。」の考へでゐるのなら、何も、腹立つことはない。怨むにも當らない。約束を楯に、返金を迫ることもしなければ、従つて、朋友を失ふこともない。

三の二 加藤清正の華押

◆ 蜉蝣の一期。「日本俚諺」

朝鮮出征中の諸將から、連判の書を太閤へ贈ることがあつた。時に、加藤清正の華押は、畫が多くて、書くのに、稍や、暇が取れた。見咎めたのは、福島正則で、

「病氣が重つて遺言狀を書く時、それでは、都合が悪からう。」と、冷かし氣味でいふと、清正は、きつとなつて、

「縦ひ、屍を戰場に曝すとも、汚く逃げて、疊の上で死なうとは思はぬ。遺言狀など、要るものか。」といつて退けた。正則は、その儘、口を噤んだ。

生還を期して、戰場に臨むのは、臆病者の事である。勇士の志は、屍を馬革に裏むに在つて、彼れは、久しく、死生の間を超脱してゐる。朝を以て、夕を計り

得ない武人の身には、これ、當然の覺悟である。

が、朝を以て、夕を計り得ないものは、武人の身のみではない。果敢なしや、今朝見し人の、面影の、立つは烟の、夕暮れの空。

といひ、

明日ありと思ふ心の、あだ櫻、夜半に嵐の吹かぬものかは。

といふもの、これ、萬人共通の運命である。果して然らば、萬人の日常が、取りも直さず、戰場暮しである。死神の矢が、絶えず、飛んでゐる。鐵砲の丸が、雨の如くに、降つてゐる。何時、中るか、寝てゐて、中るか、起きてゐて中るか、飯を食ひながら中るか、演劇を見ながら中るか、神ならぬ身の、知る由はないが左に右、中るには相違ない。中つて、死んで、日暮里、町屋などの火葬場へ送られる者が、日々、夥たしい數に上つて、當局者は、死體の處分に困る場合さへあるといふ。

老後、死の近づくに及んで、遺言状を認めるの例であるが、斯うした運命の我々、戰場暮しの我々には、その暇がないかも知れぬ。華押の畫の多少などは、恐

らく、無要の論であらう。

遺言といへば、時々刻々の我々の言葉が、遺言である。俳聖芭蕉は、臨終に、弟子等から、辭世の句を需められると、

『年來、自分の讀み捨てた句は、皆な、辭世ぢや。』といつたとか。運命を知る者の言である。皆な、辭世である。皆な、遺言である。一寸、散歩に家を出るのが冥途の旅への首途である。假初めに別れる時が、永久の暇乞ひである。

三の三 一時の苦み

◇凡そ、惡運は、これを忍ぶことによりて、これに打ち勝つべし。

「ウアーシル」

昔し、或る國の王様が、御殿を造られるに就いて、國中の大工、左官、石屋に『急々、都へ上れ。』と命令を下された。

その王様は、吝嗇で、残酷で、短氣で、平生、人民を苦しめることを仕事とした程の人であるから、召された大工や石屋は、

「何うせ、たい働きに定つてる。馬か牛のやうに追ひ使はれて、それで一文にもならないのだから、いやはや、堪つたものぢやない。」と不平だらだら！けれど逃げ隠れもならず、役人にせつかれて、濫々、都へ上る中に、一人、ずるい左官があつて、

「私は、俄かに、盲人になりました。」と儼はり、まんまと、苦役を免れた。

すると、或る大工が、聞きつけて、

「ふむ、盲人になれば、免されるか。」とばかり、商賣道具の鑿を執つて、我れと我が目を潰しにかゝつた。妻は、びつくり、その手を壓へて、

「成程、王様の仕事は、苦しいだらう。けれど、一時の事だ。一時の苦みを脱れる爲めに、永久の苦みを求めるなどは、お前、馬鹿けてゐないかね。」と忠告し強つて、都へ上らせた。

「凡そ、悪運は、これを忍ぶことによりて、これに打ち勝つべし。」——而も、一旦、打ち勝つた上は、悪運も、悪運ではない。彌が上にも、その人の忍耐力を強くし、勇氣を勵まし、その人に與ふるに、機智、才能、他人に對する同情心を以てする。或ひは、成功の機會を供して、悪運、却つて、好運となることさへある。

蓋し、運の好悪は、一瞥の能く知る所ではない。久しきを経て、事、初めて、明白になるのである。

果して然らば、悪運に對する最良の態度は、これを忍ぶに在る。その悪運が、到底、免るべからざるものなる時に於て、殊に然りである。一時の苦痛を免れんが爲めに、永久の苦痛を求めんとする薄志弱行の徒は、思はなければならぬ。

三の四 あなた任せ

◇ともかくも、あなた任せの、年の暮。「小林一茶」

「他力信心々々と、一向に、他力にちからを入れて、頼み込み候輩は、遂に、他力繩に縛られて、自力地獄の炎の中へ、ほとんと落ち入り候。

其の次に、かゝるきたなき土凡夫を、うつくしき黄金のはだになし下されと、阿彌陀佛におし誂へに誂へばなしになして置いて、はや、五體は佛染みたるやうに、悪すましなるも、自力の張本人たるべく候。

問うて曰く、いか様に心得たらんには、御流儀に叶ひ侍りなん。答へて曰く、別に小むづかしき仔細は存ぜず候。たゞ、自力、他力、何のかのといふ、芥もくたを、さらりとちくらが沖へ流して、さて、後世の一大事は、其の身を如來の御前に投げ出して、地獄なりとも、極樂なりとも、あなた様のお計ひ次第あそばされくださりませと、御頼み申すばかりなり。如此決定しての上には、南無阿彌陀佛と云ふ口の下より、慾のあみを張る、手長蜘蛛の行ひして、人の目をかすめ、世渡る雁のかりそめにも、我が田へ水を引く盗み心を、ゆめゆめ、持つべからず。然る時は、あながち、作り聲して、念佛申すに及ばず、願はずとも、佛は、守り給ふべし。是れ、即ち、當流の安心とは申すなり。あなかしこく。

ともかくもあなた任せのとしの暮。(小林一茶)

同じ佛の教へにも、自力の聖道門と、他力の淨土門と、この二通りある。これに就いての論は、姑らく措いて、人間の、甚はだ、無力のものであることを知る吾等は、他力、「あなた任せ」の生活こそ、最も安全な生活であることを疑はな

い。

但し、吾等の所謂、あなた任せは、自然任せの謂ひである。事には、人力の及ぶ範圍と、人力以上の範圍とがある。人力以上の範圍は、天命の範圍である。即ち、自然の領分である。人力範圍の内に於て、人力を盡すのは、當に然るべき所であるが、一たび、その範圍を逸して、天命、自然の領分に立ち入り、これに干渉しようとか、れば、そこに、無理が出来る。無理は、通らない。通らなければ、

人生、意の如くならざるもの、恒に、十に七八の歎聲となり、失望となり、煩悶となり、苦痛となる。寧ろ、己れの領分を守

りて、それ以外の事は、天命任せ、自然任せ、あなた任せ、成行任せに従ふには如かぬ。

孔子が、

思ふこと、位を出でず。

といつてゐるのも、亦た、自然任せの意である。手島皆庵の譯歌に、

無理いはず、無理せぬ外は、なかりけり。これを思ひの、位とはいふ。

と。然り、孔子の語も、自然任せといふも、畢竟、無理をしないことである。

無理をしないと云ふことは、何人も、異存はあるまい。尙ほ且つ、無理をする

のは、如何？ 金持ちが、貧乏人を恵むのは、これ、當然である。當然は、自然

である。然るに、貪慾を事とする。無理ではないか。貧乏人が、質素、儉約に身

を持つのは、これ、當然である。自然である。然るに、借金して迄、美服を飾る

は無理でないか。借りた金を返すまいとする、無學の癖に、學者顔をする。親の

許さぬ縁結び、遊んでゐて、一攫千金の夢など、我々の日常は、すべて、無理盡

しである。微力な人間を以て、自然の領分に立ち入るのである。慎しななければ

ならぬ。

三の五 太閤の傲語

◇務めは、自ら知るに在り。「呂氏春秋」

文祿の役に、太閤秀吉が、京都を發して、肥前の名護屋へ向はうとすると、
「朝鮮へ渡るのは、漢文の解る者がなくては、不便は勿論、第一、日本の恥ぢに
もなりません。」といふ者があつた。秀吉は、せゝら笑つて、
「何、向ふの鳥跡文字など、學ぶに當らぬ。自分は、彼れに、日本の輕便な假名
文を使はせてやるのぢや。」と傲語した。

卑屈は、謙遜の似而非なるものである。傲慢、已惚れ、
我が家の佛尊し。

とばかり思ひ込んで、妄りに、他を貶すのは、勿論、譽めたことではないが、卑屈を事とし、滅多に、他人のものを羨み、あり難がるのも、宜しくない。

人は、自ら知らなければならぬ。自ら知るとは、己れの価値を知るのである。己れの価値を知る時、初めて、眞の謙遜があり、眞の自尊がある。眞の自尊は、美德である。

日本の文明は、模倣文明である、といはれる。政治、經濟、教育、文藝、すべて、西洋の眞似事であるなどは、卑屈に過ぎぬが。我が國固有の文明にも、取るべき長所は、多々ある筈。その長所を自覺して、國民的自尊心を勵まし、以て、模倣文明と抗争するのも、勇者の一仕事であらう。

三の六 秀吉怒りを藏さず

◇、さらさら、尻洗ひ行く、流れ川を、穢く留むる、人ぞ、糞念。「脇坂忠堂」

牧陣の時、徳川氏の士、榊原小平太康政、諸所に建て札をして、織田家に向ひて弓を引く事、不義、惡逆の至りなり。

と書きつけ、豊臣秀吉を誹つた。秀吉は、一見、齒齧みをして立腹し、

「彼奴の首を取つて來た者には、褒美として、十萬石の地を與へるぞ。」との布令をさへ出した。

やがて、兩軍の間に、和睦が成ると、秀吉は、家康に向つて、

「さて、最初の使者には、小平太を寄越されよ。」と注文し、さて、京都へ歸つた

斯くて、康政が上洛すると、秀吉は、これを引見して、

「好く、見えられた。最初、建て札を見た時には、お前の憎い首を、一目、見たいとばかり思つたが、思ひ返せば、さてさて、あり難い志ぢや。この事をいひたさに、特に、お前を迎へたのぢや。小平太といふのも如何？ 叙爵の事に取り計はう。」と語り、手厚く饗應して、引き取らせた。

康政は、この時以後、式部大輔と稱することになつた。

蘇東坡の留侯論にいふ。

天下に、大勇なるものあり、卒然、これに臨んで驚かず。故なく、これに加へて怒らず。此れ、その挾持する所のもの、甚はだ大にして、その志、甚はだ遠ければなり。

と、古來、大事業を成した人は、何れも、一忍、以て、百勇を支へ、一靜、以て、百動を制し得た所の、所謂、大勇の士であつて。滅多に怒る者は、半途で事を破つてしまふ。

この間に在つて、滅多に怒つた秀吉が、能く、大事業を成し得たのは、異例に近い。蓋し、秀吉は、忽ち怒つて、忽ち和らぎ、永くは、心の平靜を失つてゐなかつた。怒りの弊に罹つて、事を破るに至らなかつた所以である。

怒るべくんば、宜しく、秀吉の如くに怒るべきである。怒りを藏し、怨みを宿め、何時々々迄も、根に葉に持つて、相手を苦しめ、自め苦しめて已まうとするのは、執着の爲である。戒しめなければならぬ。

三七 麝香猫の三變化

◇多く見て、殆きを闕き、慎しんで、その餘りを行へば、悔い寡し。「孔子」

旅人、道中で、一匹の麝香猫を捕へ、懷ろへ入れ、只管、行手を急ぐ程に、やがて、谷川の畔りへ出た。是非なく、それを渡らうとして、着物を脱ぎにかゝると、不思議や、麝香猫は、毒蛇に變じた。驚きながらも、『折角、こゝ迄持つて来たものだから。』と、そのまゝ、毒蛇を抱いて行かうとすると、愈よ不思議！今度は、一塊りの黄金になつた。

時に、それを見てゐた一人の愚人、

『毒蛇を抱くと、黄金になる。こりや、面白い。苦しい思ひをして、百姓をしたり、行商に出たりする位なら、毒蛇を搜した方がいゝ。金儲けの道は、先づこれが、一等らしいぞ。』と、心算かに領きつゝ、早速、毒蛇を捕へて、懷ろへ入

れた。すると大變！黄金になる筈の毒蛇が、喉を噛む、腋を螫すの始末に、驚く間もなく、毒が、忽ち、全身に廻つて、愚人は、あはれ、死んでしまつた。

他人の毒蛇が、黄金に變つたとて、自分も、直ぐ、毒蛇を抱くなどは、危険極まる。他に道がなければ左に右、妄りに、危険を冒すなどは、天命を知る君子の業ではない。

命を知る者は、巖牆の下に立たず。

とは、孟子の語である。鑑みなければならぬ。

但し、孟子の所謂、「命を知る」とは、「眞に、命を知るのである。熟慮に熟慮を加へ、注意に注意を加へて、尙ほ且つ罹る禍ひなら、これを天命と視てよい。輕卒に危険を冒して、忽ち失敗し、

「天命だ。仕方がない。」といふ者は、まだまだ、眞に、天命を知らないのである。

三の八人に諭すの語

◇心から、横さまに降る、雨はあらし、風こそ夜の、窓は打つらめ。「日蓮上人」

「一、無くてはならぬ人となるか、有つてはならぬ人となれ。沈香もたけ屁もこけ

二、牛羊と爲つて、人の血肉に化せずんば、豺狼と爲つて、人の血肉を喰ひ盡せ。

三、身を棺槨の中に投じ、地下千尺の底に埋了したる以後の心に非ずんば、ともに、天下の經綸を語るべからず。道義、道徳も、夫れからの事なり。」

河合繼之助の「人に諭すの語」一篇、豪傑の説だけに、一と二とは、語弊がある。人間、無爲にして已むべからず、この意とだけに見て、置けばよい。

之は、至言である。人間、慾があり、我れがある中は、その言行、すべて、公正なるを得ぬ。眞つ直ぐに降る筈の雨が、風に吹かれて、横ざまに、夜の窓を打つ如く、その慾、その我れに遮ぎられて、多少の私曲あるを免れない。無慾、無我、然る後ち、正當の考へがあり、正當の言葉があり、正當の行ひがある。西郷南洲も、命も、名も、金も、官位も要らぬ、無慾、無我の人でなければ、與に、天下の大事を謀るに足らぬ、といつてゐる。

所謂「一身を棺槨の中に投じ、地下千尺の底に埋了」するとは、無慾、無我になるの意である。誰れかいふ？無我は、佛氏の空談に過ぎぬと。否、これ、修養の極致である。無我の人こそ、眞の人である。

□懦夫よ、汝は蟻を見て、生活の道を學べ而して、其齷齪たるに倣ふて、己れを改良せよ。

ス
マ
ー
ト

三の九 上杉謙信の詩

◇詩歌、雄辯、音樂、繪畫の研究は、最も著るしく、人の氣質を改良す。

—「ヒューム」—

上杉謙信は、軍を越中に進めた一夜、諸將を集めて、觀月の宴を張つた。その席上の詩に、

霜滿三軍營 秋氣清。 數行過雁月三更。

越山併得能州景。 任他家鄉念遠征。

(霜は、軍營に滿ちて、秋氣清し。數行の過雁、月三更。越山、併せ得たり、能州の景。任他家郷、遠征を念ふ。)

軍中、月を賞し、詩を詠する——亦た、風流といつてよい。

風流や、風雅や、閑人の戯れに似て、實は、人格の一要素である。詩もよい。

歌もよい。繪もよい。彫刻もよい。平生、俗事に忙殺せらるゝ者は、最も、これ等の嗜みがあるべきである。その人物を高尙にし、餘所目にも、床しく見受けられる。

試みに、上杉謙信の生涯から、この詩一篇を除き去れ。彼れは、一本強漢に過ぎぬ。その傳記は、如何に落寞を極むるであらう？

三の二〇 小牧の役の平八郎

◇善き人を見れば心の、磨かれて、鏡に向ふ、心地こそすれ「古歌」

小牧の役に、徳川方の本多平八郎忠勝は、敵將豊臣秀吉が、大軍を率ゐて、長久手へ向ふのを見ると、僅かに五百人程を引き具して、小牧を發し、これも、長久手指して、馳せ向ふ途すがら、兩軍の間は、たゞ一筋の小川を隔てゝるるばかり。平八郎は、足輕を進めて、鐵砲を打ちかけさせ、敢へて、一戦を挑みかゝつ

た。その形勢、

螳螂の斧、龍車に向ふ。

の類で、まことに、危ふく見られたが、秀吉は、見ない風をして、一切、相手にならなかつた。

やがて、龍泉寺の前迄來ると、忠勝は、駒を下り、川へ牽き入れて、手づからその口を洗ふなど、綽々たる餘裕を示した。

秀吉は、忠勝始終の様子を、心憎く思ひながら、左右を顧みて、

「あの、鹿の角を冠つたは、大將と見受ける。誰れか、見知つた者はないか。」と問うた。

「先年、姉川の合戦で、あの武者扮装を見受けました。本多平八郎でござりませう。」と答へたのは、稻葉伊豫守道朝である。

秀吉は、はらはらと、涙を流して、

「五百にも足らぬ小勢で、味方の八萬に双向はうとする。九死一生は愚か、千死に一生もあるまい。けれど、道に暇を取らせて、主人に勝たせやうとの志、智と

いひ、勇といひ、忠といひ、まことに、無類の平八郎ぢや。秀吉も、運があつたら、戦には勝たう。けれど、あたり、勇士を討ち取るまいぞ。」と戒しめて、堅く弓、鐵砲を差し止めた。

善を好むと稱して、他人の善は、これを好まず、その陰事を許き出して、その不善を證し、これを誹つて快とするは、如何？ 勇を貴ぶと稱して、他人の勇はこれを貴ばず、その既往を引き來つて、その怯懦を證し、これを貶して快とするは、如何？ 他人の學問に悪言を放ち、他人の技藝に非點を打つて、得意顔をするのは、自身、學問を嫌ひ、技藝を厭ふのである。眞に、善を好む者は、他人の善も、これを好む。秀吉が、本多平八郎の武者ぶりを見て、これを激賞し、その勇を成さしめやうとしたのは、眞に、勇を貴ぶものといつてよい。

孔子の語に、

君子は、人の美を成して、人の惡を成さず。小人は、これに反す。

とあるに就いて、伊藤仁齋は、

君子の心は、善を善とすること長くして、惡を惡とすること短し。故に、人の美名あるや、褒稱揄揚して、以て、その事を成全せんと欲す。その、惡名あるや、分疏、恕宥して、そをして、惡人たるに終らざらしめんと欲す。……小人の心は、刻薄にして、善を忌む。人、美名あれば、隱伏を發摘して以て、その事を沮壞し、惡聲あれば、文致、羅織して、以て、その罪を證成す。君子、小人、心を用ふるの同じからざる、毎々、此くの如しといつてゐる。併せ考へて、人の美、人の善を愛すること、己れの美、己れの善の如くなるの、雅量を得たいものである。

三〇二 佞僂の療治

◇角を矯めて、半を殺す。「日本俚諺」

醫者の門前を通つて、「四百四病、何でもござれ。」の看板を見た尙儂の男、その儂、走り込んで、

「手前は、御覽の通りの美男子。悲しいかな、背中が、こんなである爲めに、不具者よと嘲けられ、毎日、泣きの涙でござる。何とか、治療の途がありますまいか。」と尋ねると、醫者先生

「ふむ、ふむ……」と頷いて、

「看板に偽りなし。俺の手にかゝつて、癒らぬ病氣があるものか。よしよし、早速、癒して上げるよ。この床の上へ、腹這ひにおなり。肌を脱いでな。」といひ、病人がその通りにすると、先づ、背中へ甘酒を塗り、その上へ、厚い一枚の板を載せ、全身に力を罩めて、ぐんぐん、ぐんぐん、壓しつけた。病人は、堪つたものぢやない。

「あ痛つ……ういむ。」といふと、眼が飛び出して、死んでしまつた。

「角を矯めて、牛を殺す。」——牛の角の恰好が悪い。といつて、それが、生れつ

きである以上、即ち、自然である以上、その儘、放つて置くの外はない。力任せに、無理な矯め方をすれば、あたら、牛を殺してしまふ。

水を治める者は、水の自然に従つて、低きに導き、海へ放つ。若し、山へ片づけやうとすれば、自ら溺れる迄である。

何事も、無理は通らぬ。自然に従ふの外はない。近來、家の身上が、傾いて來た、何とか昔しに返したい。何とするか。

— 富貴に素しては、富貴に行ひ、貧賤に素しては、貧賤に行ふ。

と、奢侈を戒しめて、儉約を守り、遊惰を廢めて、勤勉に身を持つ。これ、自然に従ふので、復興の策、この外にはない。依然として奢侈、依然として遊惰。而して、金を得やうとすれば、詐偽か、窃盜か、一攫千金の相場事か、何れ、無理な事をしなければならぬ。無理は、通らない。不自然は、破滅の基である。益す、身上を悪くして、と、家をも身をも亡すのが落ちで、その愚は、角を矯めて、牛を殺すに等しい。寧ろ、孔子に従つて、

富にして求むべくんば、執鞭の士と雖も、吾れ、亦た、これを爲さん。如し

求むべからずんば、吾が好む所に従はん。
とばかり、貧賤の地に安んずるに如かぬ。

三の二 書生を戒しむ

◇實才を死生の際に磨く。「勝海舟」

「人、難に臨みて、死を畏るゝは、固より、鄙しむべし。然れども、速かに死するを以て快となすものも、亦た、貴ぶに足らず。本邦人は、性、標急にして、動もすれば、輒はち、死を決す。是れ、其の弊なり。吾れ、嘗つて謂ふ、我邦の武士は、元龜、天正の際より盛んなるはなしと。然れども、當時の風尚は、一死、身を潔くするを以て、能事畢るとなし、復た、後患を顧みず。夫れ、萬般の責任を一身に擔はんと欲せば、至艱、至難に耐へて、綽々として餘裕ある者に非らざるよりは、能はざるなり。」

嗚呼、幕府の末造に方りて、生死の途に出入し、窮厄を踏みて、心膽を鍊り、終に、皇政維新の洪業をなしたるものは、既に黄土に歸せり。今の局に當る者は概ね、其の支蔓のみ、此後十年、當に庶務を調理し、國威を振揚すべきものは汝等書生の肩頭に懸る。汝等、果して、能く、其の責任に耐ゆるか、否らざるか。予が見る所を以てすれば、近時の書生は、僅かに一二の學科を修め、多少の智識を具ふるに過ぎず。而して、天下は、一大活物にして區々たる死學問、小才子の能く辨する所にあらず。必らずや、世間の慘風を凌ぎ、人生の酸味に飽き、世態を知り、人情を盡して、然る後ち、與に、經世の要務を談すべし。吾れ、後進の輩に告ぐ、宜しく、身を困窮に投じ、實才を死生の際に磨くべきのみ。(勝海舟)

今の學者も政治家にも、利巧者は多い。才智もあり、手腕もあり、廟堂に立つて、お茶を濁すことの出来る者も、少くない。立派な議論を吐きもする。悲しいかな、腹が出来てゐない。「至艱、至難に耐へて、綽々として餘裕」があり、能く、「萬般の責任を一身に擔」ふといふやうな、大氣魄を缺く。その利巧は、鼻先思案である。その議論は、机上の空論である。

といふのが、彼等は「幕府の末造に方りて、生死の途に出入し、窮厄を踏みて心膽を鍊り、終に、皇政維新の洪業をなしたるもの」ではない。多年、學校に在つて、種々の知識を吸収した、といふ以外には、何の試煉をも経てゐない。何の修養をも積んでゐない。戦術に通じた者が、戦場の勇者でない如く、物理學者、數學者が、家を建てるに足らぬ如く、美學の先生が、音樂家でなく、畫家でなく彫刻家でない如く、政治の理論に精通した者、必らずしも、偉大なる政治家ではない。

「天下は、一大活物」である。「區々たる死學問、小才子」を以て、これに當れば氣怍れ、神、戦き、茫然として自失するの外はないのである。

であるから、志を天下、國家に存する者は、知識の吸収を以て足れりとすべきではない。「必らずや、世間の慘風を凌ぎ、人生の酸味に飽き、世態を知り、人情を盡して、然る後ち、與に、經世の要務に任ず」ることが出来る。「身を困窮に投じ、實才を死生の際に磨く」といふもの、これ、修養の秘訣でなければならぬ。勝海舟、斯くの如くに修養した。海舟の知己なる西郷南洲も、斯くの如くに

修養した。南洲の詩に、

幾たびか辛酸を経て、志、始めて堅し。の句があり、又た、平生の言には、「自分は、これ迄、艱難と云ふ艱難を嘗め盡して來た。だから、今後、何事に出遇はうとも、動搖はすまい。」とあつたとか。知らず、今の學者や政治家は、如何？餘りにお粗末に過ぎはせぬか。

三の二三 僧正禪名を厭ふ

◇名譽が、徳に伴ふこと、恰かも、その影の如くである。「シロセ」

昔し、比叡山の僧正良覺といふ僧は、藤原公世の兄で、名門の出ながら、極めて、腹の黒い人であつた。寺の傍らに、大きな榎の木があつたので、人は、綽名を「榎の木僧正」と命けて憎んだ。良覺は、「可厭な名を命ける。」と怒つて、その木を伐り倒した。

木を伐ると、根が残つた。人は、「伐杭の僧正」と綽名した。
愈よ立腹して、根を掘り取つてしまつた。跡が、大きな池になつた。人は、又復「掘池の僧正」なる綽名を呈した。

名は、實の賓である。實を離れて、名そのものに、善悪はない。實なる良覺僧正が、善良な人であつた位なら、「榎の木」の僧正でもよい。「伐杭の僧正」でもよい。「掘池の僧正」でもよい。これ等の綽名は、晉に、僧正の徳を傷つけるに足りなかつたのみではなく、寧ろ、名譽の象徴として、人の、争ひ稱ふる所となつたであらう。

大石良雄は「晝行燈」と綽名せられた。大石の人物に對し、何の交渉があつたか。良雄は、良雄であつた。巨然たる一大人物の實は、この綽名の下に埋没されるものではなかつた。

弓削道鏡は、和氣清麻呂の名を、穢麻呂と改めて、大隅へ流した。以て、清麻呂を瀆すに足らず、和氣の流れの清らかなれば、人は、この人を尊敬して、護王

明神の偉徳、今に至つて、いやちこである。

綽名が、何であらう？ 名が、何であらう。實ある名の善悪は、實なる人の善悪に定まる。貴族の實のない限り、貴族の名も、名譽ではない。富豪の實のない限り、富豪の名も、名譽ではない。教育者の實のない限り、教育者の名も、名譽ではない。政治家の實のない限り、政治家の名は、名譽でもない。議員の實のない限り、議員の名も、名譽ではない。學者の實のない限り、學者の名も、名譽ではない。慈善家の實のない限り、慈善家の名も、名譽ではない。世間にも、眼はあつて、これ等の名も今や、輕侮を以て迎へられてゐる。その實がないからである。

小人は、これを知らぬ。さては、滔々として、虚名を貪る。虚名は、嘘である。嘘は、剥けずにある。宜しく、實を改むべきである。人が、蛇を嫌ふのは、蛇といふ名を嫌ふのではない。蛇の名を鰻と變へた所で、人は、蛇を喜ばないであらう。

賣ト先生糠俵に、

昔し、梟、東をさして飛びゆく。鳩、向つて曰く、何處へか、飛びさり給ふ。梟の曰く、此里の人、我聲の悪きを嫌ふ。故に、飛び去るなり。鳩、ぐうぐう、笑うて曰く、飛び行く先の人々も、また、汝が聲の悪きを嫌ふべし。汝が聲の悪きを直さば、何ぞ、飛び去ることのあらん。併せ考へて、虚名の詮なきことを知るがよい。話の僧正の如き、宜しく、綽名を憂へずして、實を憂ひ、その腹黒を改良すべきであつたのである。

三の一四 南洲粗食に安んず

◇富貴、榮達は、以て、人を幸福ならしむるに足らぬ。「ラ・フランテース」

西郷南洲、或る日、弟従道を日本橋濱町の假寓に訪ねると、生憎の不在に、

女中を呼んで、

「腹が空つた。飯を食はしてくれ。急ぎぢや。」と命じた。女中は、早速、豆腐汁を作つて供した。南洲は、その幾椀かを快喫した。

所へ、従道が歸つて来て、同じく、その豆腐汁を食ふと、殆んど、水煮のやうで、不味いこと夥しい。箸を投じて、

「水臭いではないか。」と女中を叱り、南洲には、

「不味かつたでせう。お氣の毒でした。」と、女中に代つて、疎忽を詫びたけれど、南洲は、一向、平氣なもので、

「汁の甘い辛いは、いふに足らぬ。飯が食へれば、それでよい。こんな些事の爲めに、召使を叱るのは、よくない事ぢや。」と、あべこべに、従道を戒しめた。

南洲は、自宅に在つても、曾つて、食物の爲めに、家人にぐづつくことをしなかつた。食物の目的は、以て、生命をつなぐに在る。この目的に適ふ限り、他は、何うでもよい——斯う思つてゐたのである。

西郷南洲が、食物に好き嫌ひをいはなかつたのは、偉人の常、その憂ふる所が天下、國家に在つて、衣、食、住の些事を思ふ所の餘裕がなかつたのであらうが、一つは又た、生來、貧家に人と爲り、多年、困窮に馴れた身とて、如何なる粗食も、如何なる粗衣も、能く、この人を苦しめるに足りなかつたのである。こゝに於て、貧賤の人は、富貴の人よりも、幸福である。貧賤の人は、粗衣、粗食も、苦にはならず、偶ま、美衣、美食にありつけば、その愉快は、一入ならざるを得ぬが、富貴の人は、平生、衣食の美に馴れてゐる爲めに、何を着、何を食つても、然迄、旨くはなく、一朝、粗衣、粗食に安んずるべく餘儀なくされた時の苦しきは、殆んど、堪ふべからざるものがある。富貴の人、幸福ではない。幸福は、却つて、貧賤の人のものである。獨り、衣、食、住の事のみではない。人の譏りに馴れた身には、譏りも以て、情を動かすに足らぬ。人の嘲りに馴れた耳には、嘲りも、以て、心を痛めるには足らぬ。譏られて、青くなり、嘲けられて、赤くなるのは、不斷、他人の阿諛に馴れた人の事である。超脱が、哲人の態度であるならば――

毀譽、得喪は、眞に、これ、人生の雲霧なり。人をして昏迷せしむ。この雲霧を一掃すれば、則ち、青天白日なり。「佐藤一齋」

毀譽、榮辱の來る、獨り、以て、その心を動かさざるのみならず、且つ、これを資りて、以て、切磋、砥礪の地と爲す。故に、君子は、入るとして、自得せざるなし。若し、譽れを聞いて喜び、毀りを聞いて蹙まば、それ、何を以て、君子とせん。「王陽明」

などの語が、成程、それに相違ないならば――

我れを牛と呼べば、これを牛と爲し、我れを馬と呼べば、これを馬と爲す。

「莊子」

世を擧げて、これを譽むるも、勸むるを加へず。世を擧げて、これを誹るも沮むを加へず。「同」

といふが、修養の極致であるならば、返す返すも、幸福は、貧賤の人のものである。富貴の輩は與からぬ。

三の一五 長過ぎる手綱

◇持つたが病ひ。「日本俚諺」

或る男、竹竿を持つて、見附の門を入らうとして、さて困つた。横にすると、柱に間へる。縦にすると、屋根に間へる。といつて、切るのは惜しいもの、まごまごしてゐると、通りかゝつた人が、

「ここから、三里程行くと、李三老といふ人がある。大した智者だ。その人に聞くがいい。何とか、工夫があるだらう。」といつてゐる所へ、機好く、李三老が、やつて来た。見ると、驢馬の尻のところに乗つてゐる。

「先生、何だつて、真中に乗らないのです？ 落ちこちますよ。」といふと、三老の答へに、

「否、手綱が長いので……」

手綱が長いからといつて、危なかく、驢馬の尻に乗る——正しく、道具に使はれたのである。

人は、動もすると、道具に使はれ、持ち物に使はれる。持つ所の多い者は、殊に、然うである。金持ちは、金に使はれて、

「貸した金が、ふいになりはせぬか。」と、日夜、心を痛める。家作持ちは、家作に使はれて、屋賃の倒れ、火事の半鐘に、年中、びくびくものである。道具持ちは、道具に使はれて、地震、火事の際など、逃れることが出来ず、往々、道具と心中する。田地持ち、工場持ちは、田地、工場に使はれて、年貢の取り立てに、小作人の怨みを買ひ、賃銀問題に、労働者の怒りを求めて、夜の目も、落ちついては眠られない。官位の高い者は、官位に使はれ、名譽のある者は、名譽に使はれ、主人の虐待に泣く奴隷と一般、その官位、その名譽に苦しめられて、始中終泣きの涙でゐるとは、何と、哀れなものではないか。畢竟「持つたが病ひ。」である。適度に持てばよいものを、多くを貪り、満つるを望む所から、人一倍、苦心

があり、人一倍、苦勞がある。

抑も、何が爲めの持ち物だらう？ 微々たる五尺の一身である。僅々、五十年の壽命である。この身一つを養ふのに、十千萬兩の金は要らぬ。大厦高樓の必要はない。起きて半疊、寐て一疊、死んで、焼いて、灰にすれば、尺にも足らぬ素焼きの瓶に收まつてしまふ。莊子曰く、

鷓鴣、深林に巢くふも、一枝に過ぎず。偃鼠、河に飲むも、満腹に過ぎず。

と。人間の事、亦た、殆んど、これである。

物を持つのは、何の爲めか、畢竟、一身を養はんが爲めである。一身を養ふ上に必要な物は、これを持つこと、勿論、妨げぬ。それさへも、人によつて、必要とする所が違ふ。許由は、一瓢を煩はしとして捨て、ダイオゼンスは、一椀を無用として抛つた。それ等は、哲人の事、及びもつかぬとして、常識上、必要とする所は、大概、判つてゐる。必要以外に物を持つてば、啻に、寸益がないのみならず、却つて、持ち物に使はれ、心を苦しめるの弊がある。俗物の徳川家康すら大厦、千間なるも、夜、臥するは、八尺のみ。良田、萬頃なるも、日に食ふ

は、二升のみ。千疊敷、萬疊敷の家を持つとも、臥する所は、一疊なり。前に八珍を列ぬるとも、食ふ所は、口に適ふもの、二三種に過ぎず。天下の主にも、口に喫する所は、たゞ一飯より外になし。然るを何ぞや、民を苦しめて、身の榮耀を好み、金錢を貯ふるは、愚の至りなり。此の如く、目先の見えざるを、唐の太宗は、我が股を割きて、我が腹に食はするに譬へられたり。股の肉盡くれば、我が身、已に、亡ぶるが如し。

といつてゐる。富貴の人は、この所、鑑みなければならぬ、戒しめなければならぬ。

若しそれ、持つても、持つ所に使はれず、持つに従つて、人を恵み、世を益するやうならば、巨萬の財も、無用ではない。世間は、その持つ所の、益す多からんことを望むであらうが、然く持つには、須らく、無心の修養を積まなければならぬ。無心とは、如何？ 留まる心がないのである。持ち物に執着しないのである。經に曰く、

應無所住、而生其心。

(應に、住まる所なくして、その心を生ずべし。)

と。斯くの如くに持つのである。これを要するに、長過ぎる手綱は、切つて捨てるがよい。必要以外の持ち物は舉げて、人に施すがよい。爲めに心を勞するのは、愚である。

三の一六 許由孫晨の事

◇賢き人の富めるは稀れなり。「兼好法師」

「人は、己をつまやかにし、驕を退けて、財を持たず、世を食らざらんとぞ、いみじかるべき。昔より、賢き人の富めるは稀なり。」

唐土に、許由といひつる人は、更に、身に隨へるたくはへも無くて、水をも、手して捧げて飲みけるを見て、なりひさごといふものを、人の得させたりければ或時、木の枝に掛けたりければ、風に吹かれて鳴りけるを、かしかましとて、棄

てつ。又、手に掬びてぞ、水も飲みける。如何許、心の中、涼しかりけん。

孫晨は、冬の日、衾なくて、わら一束ありけるを、夕には、之に臥し、朝にはをさめけり。

唐土の人は、これをいみじと思へばこそ、記し留めて、世にも傳へけめ。これらの人は、語りも傳ふべからず。

許由の事は、高士傳に、

許由、箕山に隠る。手を以て水を捧げて、これを飲む。人、一瓢を遺る。得て以て取り飲むに、飲み訖りて、樹上に掛く。風吹きて、歴々、聲を作す。

尙ほ、以て、煩はしと爲し、遂に、これを去つ。

と見え、孫晨の事は、蒙求の註に、孫晨、字は元公。家貧しく、席を織りて、業と爲す。詩書に明かなり。京兆の功曹となる。冬月、被なし。藁一束あり。暮に臥し、朝に收む。と見えてゐる。直ちに、取り學ぶことは出来ない迄も、反省、以て、己れの慾

心を制するには足らう。

三の一七 名人太郎堀秀政

◇主將の法は、務めて、英雄の心を攪る。「三略」

元龜、天正の頃、越前の北庄——福井——にゐた堀久太郎秀政は、下を使ふのに、士分以下、足輕に至る迄、各の、その情を盡すことを第一とし、決して無理、非道をしなかつた。

例を擧げると、或る時、奉行の從者と荷を持つ者とが、荷の輕重を争ふのを聞いて、

『どれどれ。』と、自分で背負つて見て、

『予の力は、あの者よりも優つてゐる。けれど、一里も負うて來たので、大分、疲れた。持てぬといふのも、道理ぢや。』と裁斷した。

又た、家來に、泣き面の、不景氣極まる男がゐた。目からは、絶えず、涙を流してゐる。眉をしかめてゐる。一舉一動、病人然として、見るからに、陰氣になる位。同僚は、

『不吉な男ぢや。』と嫌ひ、果ては、主人秀政に告げて、暇を出させやうとした。

けれど、秀政は、

『否!』と、かぶりを掉つて、

『佛事、葬禮どもの使者には、持つて來いぢや。大名の家には、あんな者も、扶けて置く必要がある。』といひ、依然、人並に使つた。

であるから、部下中、一人として、秀政を怨む者はなく、何れも、喜んで命を奉じた。世に、秀政を名人太郎と稱名したのは、人使ひに心を用ひたからといふ小田原の陣中で歿した。年は、まだ三十八であつた。

人の力には、限りがある。如何なる英雄、豪傑と雖も、獨力の成し得る所は、大抵、知れたもの、以て、大事を擧げるに足らぬ。赫々たるその功業は、半ば、

部下の力に俟つのである。

自然、部下の心を攪る必要がある。能く、部下の心を攪り、その悦服する所となる者のみが、その力を己れの力とし、依つて以て、大事を成すに足る。

如何か、部下の心を攪る？ 啗はすに利を以てするものも、一方法である。欺くに甘言を以てするものも、一方法である。その拙劣なるを憾む。利に従ふ者は、利の盡きると共に、散つてしまふ。殊に、人物の偉大なるものは、利の能く羅致し得る所ではない。若しそれ、甘言に欺かれるなどは、愚人の事で、そんな部下が何にならう？ 利益や甘言やは、眞に、部下の心を攪り得る方法ではない。

部下の心を攪り得る唯一の方法は、たゞ、誠の一字をそれとする。無我、無私無慾、専ら、相手の上を思ひやる至情、即ち、誠のみが、人の心を攪り、これをして、悦服せしむるに足る。決して、部下とは限らない。西郷南洲曰く、天下、後世迄も、信仰、悦服せらるゝものは、たゞ、一個の眞誠なり、古より、父の仇を討ちし人、その數、擧げて數へ難き中に、獨り、曾我兄弟のみは、今に至りて、兒童、婦女子迄も、知らざる者あらざるは、衆に秀で、

誠の篤きが故なり。誠ならずして、世に譽めらるゝは、僥倖の譽れなり。誠篤ければ、縱令、當時は、知る人なくとも、後世、必らず、知己あるものなり。

と。南洲自身、誠の人であつただけに、よく、この間の消息を知つてゐる。

秀政は、先づ、納得させ、然る後ち、部下に命じた。叨りに、部下を捨てなかつた。一片の至情、無理を命じ、部下を捨つるに忍びなかつたのである。人、若し、この心を心として、部下に對し、後進に對し、召使に對するならば、その心を攪り得て、人使ひの名人となること、難くはない。

三の一八 刑部太閤の恩に感ず

◇八百の、嘘を上手に、並べても、誠一つに、敵はざりけり。「古歌」

豊太閤は、諸大名が、御機嫌伺ひに來ると、酒宴を設けて歡待し、將棋を差し

たり、茶を點てたり、歌舞を催したり、音楽を奏したり、各の、その好む所に
随ひ、歡を竭して罷むを例とした。

或る時、諸大名の集まつたを幸ひ、茶會を開き、太閤自身、茶を點て、侷めた
茶碗が、順次、大谷刑部少輔吉隆へ來ると、吉隆は、受けて飲まうとして、茶碗
の中へ、鼻汁を垂らした。吉隆は、人も知る癩病患者で、鼻汁は、即ち、血
膿である。次へ廻すわけには行かぬ。大に當惑してゐると、太閤は、早くも、そ
れと知つて、

「刑部、その茶は、出來が悪い、點て直すから……」と、茶碗を引き取り、自分
でぐつと一喫し去つて後ち、更に點て、一同に侷めた。

吉隆は、ほつとした。と同時に、深く、太閤の恩に感じ、一死、これに報いる
の心を決したといふ。

秀吉には、この種の行ひが、屢ばあつた。評する者は、以て、英雄、人を欺く
の手段とする。これ、人間を愚にするものである。人間を知らないものである。

X X X

人間、欺かれて已む愚人のみではない。人に貴いのは、誠を以て人に對し、又た
誠に感ずるに在る。

然り、秀吉は、誠の人であつた。誠を以てして、英雄の心を攪り、その力を假
りて、彼の如き大事業を成し得たのである。

三の一九 蜘蛛あしらひ

◇誠實に優る智慧はない。「ビーコンスフキールド」

「おい、長吉、お客さまは、もう、お歸りになつた。奥にある酒肴を、臺所へ運
べ。」と旦那が吩咐けると、長吉は、眠い目を小擦りながら、座敷へ入つて見て、
「やあやあ、旨いものが、勢揃ひしてらあ。」と、忽ち目が覺める。

「こりや、何ぞ？ 卵焼きか。たつた一切れとは、情けない。」と、口へ頬張り、
「さて、隣の井は？ 蒲鉾、結構！ 刺身の食ひ荒したのは、何だが、汚なら

しいね。鮓が旨さうだ。むしやり、むしやり。お次は、何だ？」と、目を移すと飯蛸が七八つ、鉢の中に、坐禪をしてゐる。

「此奴は、豪氣だ。」と、摘む所へ、障子の外に、旦那の足音！

「こりや大變！」と、袂へ押し込み、俯向いて、徳利、盃を取る拍子に、袂の飯蛸が、轉がり出る。旦那は、早くも見咎めて、

「そりや、何だ？」

長吉、それには答へず、疊を叩いて、

「一昨日来い！ 一昨日来い！」

何程、蜘蛛あしらひにしても、飯蛸は、蜘蛛には見えぬ。

誰れかの語に、

小人、多くは、才あるなり。

とある如く、小人は、小才が利く。辯口も巧い。さては、辯口、小才に任せて世間を胡魔化し、人を欺き、鴉を驚と見せかけて、嘘八百の世を渡り、處世の妙

計、こゝに在りとする。

が、人にも眼はある。一度は、欺かれやう。二度は、難かしい。三度となつては、

「眞つ平御免！」と、相手にせぬ。一人は、欺かれやう。二人は、何うか。三人は、

眼は、驚の驚なり、鴉の鴉たるを見抜かずに置かぬ。才子の信用、こゝに至つて、零である。誰れも、相手にしなくなる。才子の才も、最早、用ふるに處なく、結局、夜逃げでもするが、落ちである。

世渡りは、信用あつての世渡りである。信用なくして、世を渡るのは、船なくして、河を渡ると一般、出来得べくもない。強ひてすれば、溺れてしまふ。

好んで偽りを弄し、人を欺く者は、自分が、社會の一員として立つのに不適當の人間であることを、自分で證明し、告白し、廣告するのである。何等の愚！

果して然らば、誠實に優る智慧はない。正直は、最良の方便なり。「ワシントン」である。才子たる者、處世の妙計の、彼れではなくて、此れであることを知らなければならぬ。

三の二〇 山岡鐵舟の家訓二十則

◇名利の爲に、學問、技藝すべからず。「山岡鐵舟」

- 一、虚言いふべからず候。
- 二、君の御恩は、忘る可からず候。
- 三、父母の御恩は、忘るべからず候。
- 四、師の御恩は、忘るべからず候。
- 五、人の御恩は、忘るべからず候。
- 六、神佛、並に、長者を粗末にすべからず候。
- 七、幼者をあなどるべからず候。
- 八、己れに快からざることば、他人に求むべからず候。
- 九、腹を立つは、道にあらず候。

- 十、何事も、人の不幸を喜ぶべからず候。
- 十一、力の及ぶ限りは、善き方に盡すべく候。
- 十二、他を顧みずして、自分の善き事ばかりすべからず候。
- 十三、食するたびに、稼穡の艱難を思ふべし。草木、土石にても、粗末にすべからず候。

十四、殊更に、着物をかざり、或は、上べをつくらふものは、心に濁りあるものと心得べく候

- 十五、禮義を亂るべからず候。
- 十六、何時、何人に接するも、客人に接する様に心得べく候。
- 十七、己れの知らざる事は、何人にもならふべく候。
- 十八、名利の爲に、學問、技藝、すべからず候。
- 十九、人には、すべて能、不能あり。一概に、人を棄て、或は、笑ふべからず候。
- 二十、己れの善行を、ほこり顔に、人に知らしむべからず。すべて、我心に恥

ぢぢる様つとむべく候。(山岡鐵舟)

幕末の一傑物、山岡鐵舟の家訓二十則、何れ、道理ならぬはないが、斯うした卑近の言は、左右、人の注意を逸し易い。たゞ、細々に讀む者のみが、その言の卑近なる所、却つて、その價值のある所であることを知り、偉人の説、成程と領づくであらう。

蓋し、奇警の言にも、淺薄なのがあり、平凡の語にも、深遠なのがある。旨の深淺は、いひ表はしの如何に關はらずして、言者の人格によつて定まるのである。

第十八則にいふ、「名利の爲めに、學問、技藝、すべからず候。」と。學問は、名利の爲めにすべきものではない。醫者になつて、藥禮を貪らうの、辯護士になつて、一訴訟に一萬圓づゝの報酬を得やうの、官吏になつて、百圓、二百圓の月給にありつかうのと、そんな卑俗な考へで、學問する位なら、最初から、學校などへ入らぬがよい。金儲けは、商人に限る、早い所で、商家の丁稚にでもなつた

方が、勘定に合ふ。

學問——これを主觀的にいへば、人道を知り、物理を解して、人らしき人にならんが爲めのものである。これを客觀的にいへば、人間に味をつけるもの、人間の味の素である。

人には、これと語り、これと交際して、味のある人と、味のない人とがある。見かけも立派、辯舌も爽かで、一寸、小才もある。小事を切り廻すだけの手腕もある。けれど、その語る所は、常識の範圍を出ない。

「何といつても、金の世の中だ。」位のことを、道理らしく説き立て、得意がつてゐる。乾燥無味、臆を嚙むやうな人は、畢竟、學問の素養がないのである。これを稱して、

見かけ倒し、「日本俚諺」

といふ。人間、「見かけ倒し」では詰るまい。宜しく、學問の味の素を一喫して自分に味をつけ、味のある人になるべきである。

三の二 唐犬權兵衛召し捕へらる

◇生は奇なり、死は歸なり。「淮南子」

貞享某の年某の月某の日、盜賊改役中山勘解由の配下が、唐犬權兵衛を襲ふと權兵衛は、朝來、他へ出て、家には、母と妻子、僕一人がゐる。行先を尋ねると「存じませぬ。」といふ。隣家で詢いても、「存じませぬ。」といふ。残念ながら、母等四人を縛して、引き揚げた。人質の意味である。

その日、權兵衛は、叔母の病氣を見舞つて、三の輪へ行つてゐた。歸ると、町内の者が、留守をしてゐて、「今朝、捕吏がやつて來た。お前さんがゐないものだから、阿母さんたちを縛つて、連れて行きました。大變なことになりましたね。」との事に、權兵衛は、溜息を吐いて、

「阿母や子供が、召し捕られたとあつては、その難儀を餘所にして、逃げ隠れるには忍びない。これから、自首して出ます。お氣の毒だが、何方か、御同道下さい。」と告げ、重立つ數名に伴はれて、自ら、中山邸へ出訴した。

曰く、
「今朝、手前の不在中、お役人が見えられました。母、妻子をお召し捕りになりましたとの事に、手前は、一驚致しました。母や子供には、何の罪もござりませぬ。何卒、手前をお縛り下されて、母たちには、御寛大の御處置を願ひまする。」

これ、至誠の言である。至誠に動かぬ者はない。この由、勘解由へ取り次がれると、

「流石、人に知られた權兵衛ぢや。他人とは違ふ。母や妻子は、宥して遣はす。早く、權兵衛を縛つて、庭へ廻せ。」と命じた。
庭には、母や娘が、縛られてゐた。權兵衛は、一見、

「お、」と驚き、面を曇らして、

「私の爲めに、飛んだ苦しい思ひをさせた。濟まない！濟まない！」と詫び、
「私の身は、何うなることやら？多分、これが、一生の別れだらう。大切になさ
い。」

此方は、たゞ泣くばかり、返す言葉もなく、引き取つた。

後ち數日、權兵衛は、他の男伊達仲間と共に、品川に刑せられた。

男伊達なるもの、畢竟、社會のあふれもの、當路の持て餘しものであつた。幡

隨院長兵衛といひ、唐犬權兵衛といふも、その頭目といふ迄で、別に、大したも

のではなかつた。その、氣象に於て、どこか、他人と違ふ所があつた。成程、俠

氣もあつた。氣理、人情も知つてゐた。

死を見るときも、歸するが如し。

の諦めもあつた。然ればこそ、男伊達仲間の頭目と立てられ、多少の勢力を、

その上に振ふことが出来たのである。

我利一偏、私慾一偏の人物を以てして、尙ほ且つ、人の上に立ち、威勢張らん

との横着者が、今の世、甚はだ多い。須らく、己れの心術が、一權兵衛にも如か
ないことを知つて、甲斐なき野心を棄て去るべきである。棄てることが惜しいと
ならば、翻然、自改の途に出つべきである。

三の三 田子方の傲語

◇富貴、亦た、苦あり。苦は、心の危憂に在り。貧賤、亦た、樂あり。樂は、
身の自由に在り。「白氏文集」

春秋戰國の時、魏の文侯の師田子方は、清貧、骨鯁の士であつた。道で出遇つ
た、文侯の子擊が、車を下りて叩頭すると、答禮もしないで、その儘、行き過ぎ
やうとした。擊は、立腹して、

「富貴の者が、人に驕るか、貧賤の者が、人に驕るか。」と問うた。心は、お前は
貧乏學者ではないか。この擊は、諸侯の子である。身分を忘れて、餘り、傲慢な

眞似をするな、といふのである。子方は、冷然として答へた、
「無論、貧賤の者が、驕るのぢや。富貴の者に、驕ることは出来ぬ。富貴の者が
人に驕れば、國君は、その國を失ふ。大夫は、その家を失ふ。そこへ行くと、貧
賤の士は、暢氣なもので、言葉が用ひられず、行ひが合はなければ、履を納れて
去る迄ぢや。どこへ行つても、貧乏は出来る。」
解つたのか、撃は、この言葉に感心して、拜謝して別れた。

水は、低きに就き、人は、高きを望む。高きものは、或ひは落ち、低きものは
常に、落ちつく。人間、貧程、樂なものはない。貧賤のどん底に在る人は、この
上落ちる心配もなく、言行、すべて、己れの欲する所に従つて、自由自在なるを
得る。

富貴の人が、いはんと欲する所をいひ、爲さんと欲する所も爲せば、その富貴
を失ふであらう。貧賤の人は、失はんにも物がなない。少くも、世間の非難を招く
であらう。人の誹り、嘲りに馴れた貧賤の人は、世間の思惑などに對して、一切

無頓着である。恐れず、憚からず、いはんと欲する所をいひ、爲さんと欲する所
を爲し得るのは、たゞ、これ、貧賤の人の事である。
それも、人による。己れ、貧賤の地に在つて、他人の富貴を羨む者には、貧賤
の地は、苦痛の地である。お餘り頂戴の乞食根性も出やう。富貴に阿り、權勢に
諛ふ心にもならう。甚だしければ、

貧の盗み。「日本俚諺」
にも落ちて行かう。

四百四病の病ひより、貧程辛いものはない。「同」
と、泣き言で日を送らう。たゞ、貧賤に安んじて、富貴を羨まない人は、天命
を樂しみ、自由を樂しんで、

「貧程、樂なものはない。」と空嘯く。
□才、學兼備するも、徳なくんば、輕蔑を免かれず。

シンゲールズ

三の二三 聾の試験

◇口開いて、腹綿見する、柘榴かな。「古句」

評判の馬鹿息子から、

『是非、嫁に……。』と、娘を所望された人、一應、息子を試験した上で、否やの返辭をすることとし、門の側の柳を指して、

『あの木は、何になるだらう？』と訊ねると、

『然やうさ、あの木が、大くなつたら、車の輪になりませうよ。』と息子の答へ。聞いて、此方は、

『さては、馬鹿でもないのか知ら？』と思ひながら、今度は、臺所の摺鉢を指して、

『あれは？』と尋ねる。

『あれですか。あれが、大きくなつたら、石臼になりませう、』
餘りの答へに、る合す娘は大笑ひ、腹を抱へて倒れる拍子に、思はずぶつとやると、馬鹿息子は、益す、得意になつて、

『あの尻が、大きくなつたら、雷になりませう。』
と澄した顔。あはれ馬鹿息子は、婚の試験に落第した。

隠して隠し切れないものは、心である。古歌に、

我が心、鏡にかけて、見るならば、嘸や姿の、醜かるらん。

といふが、鏡にかけて見る迄もなく、
思ひ、内に在れば、色、外に見はる。

の理で、善い心には、善い色があり、悪い心には、悪い色があり、智愚、賢不肖、勇怯、剛臆、すべて、顔色、舉動に見はれて、少しも、蔽ふ所がない。

顔色、舉動のみではない。一層明瞭に、言語に現はれる。悪人も、善人らしいことをいふ。悪人も、智者らしいことをいふ。それに、注意していふのである。

若しくは、稀れにのみいふのである。喋り又た喋りする中には、結局、本性を曝露してしまふ。

この點に於ては、人は、存外、正直なものである。

人間、自ら知らなければならぬ。自ら知つて、自分の相場を、悪人、悪人と定めた者は、宜しく、沈黙を守るべきである。「口開いて、腹綿見する、柘榴かな。」
—何人も、黙つてゐて後悔することは少いが、喋つた爲めに後悔する場合は多い。悪人と悪人は、殊に然うである、獨逸の諺に、
悪人の如くに語らんよりは、寧ろ、悪人の如くに黙せよ。
といふものを、左右、注意が肝腎である。

三の二四 繪事も心から

◇總身の内、かみの先、爪の端迄、皆、繪に相成候やう仕る事にて候。

「渡邊華山」

「繪事すら、第一の心と申ものは、志一途に立申さず候ては、物の形調ひ候て、落なく、見事に出来申さず候。又、心ばかり、矢竹に存込候とて、手も又、心の通りに動き申さず候ては、畫なり申さず候。又、心、手ばかり、自由に相成り候とて、夫にて、畫、出来候と申には參り申さず、胴體四肢、治り申さず候て机に向ひ、腹より溢れ出候やうに存込申さず候。出来申さず候。之により、總身の内、かみの先、爪の端まで、皆、畫に相成候やう仕る事にて候。」(渡邊華山)

花鳥風月、或ひは、山水なり、人物なりを畫かうとする、たゞ、形と布置を案じただけで、漫然、手を下した所で、立派な繪は、覺束ない。神を凝らし、思ひを潜め、念を罩め、心を一途にして、已れ、圖中ものになつてしまふ。寧ろ、已れと圖中ものものが、兩々、一體になつてしまふ。自分が繪か、繪が自分か、この所、一寸、區別がつかかねる、といふので、初めて、傑作が生れて來る。その必持ちたる、全然、無我である。全然、忘我である。我れもなければ、慾もない。名譽も、利害も、金も、報酬も、一切、念頭にない。

『一番、見事に作り上げて、天下に名を揚げやう。』とか、

『この繪が、帝展に入選して、千兩に賣れ、ば……』とかいふ、名利の慾は、毛頭ない。それがあつては、傑作は、思ひも寄らぬ。

繪事すら、斯くの如くである。經國の大業、不朽の盛事と稱せらるゝ文章は、尙更のことである。詩も、然うである。歌も、然うである。俳句、川柳の如きも亦た、然うである。

學問も、同斷である。他日の報酬を念じながら、師に通ひ、書を読んだとて、大成は難かしい。

古への學者は、己れのためにし、今の學者は、今の爲めにす。「孔子」

「人の爲め」——人に見せやう爲めの學問は、慾得づくの學問である。上滑りに墮するの外はない。

政治家として、國政にたづさはる者は、最も、然るべきである。憂ふる所は國家、思ふ所は國民、この身、國家と一體、この體、國民も不二、復た、名利を顧みないといふ、孟子の所謂る、先憂後樂の士のみが、政治を語るの資格を持つて

ゐる。

三の二五 太田道灌敵將の死を弔す

◇この身、影の如し。業縁より現はる。「維摩經」

鎌倉以來、武人の、禪を學ぶ者が多かつた。これを前にしては、北條時頼、同時宗の如き、これを後にしては、上杉謙信、武田信玄の如き、皆、それである。

太田道灌が、やはり、それで、禪の宗趣に於て、略ほ、通徹する所があつた。康正元年、藤澤の役に、路に横はる敵將の死體を見て、

かゝる時、さこそ命の、惜しからめ。かねてなき身と、思ひ知らずば。

「かねてなき身」の語、佛教の知識があつたればこそである。餘人の口にし得る所ではない。

X

X

X

まことに、「かねてなき身」である。我れを我れとして執着し、「俺が」で日を送るのは、我慢の凡夫、皆、然りであるが、これを小乗佛教より見る時、人は、四大の因縁所成、地、水、火、風の寄せ細工である。更に、大乘佛教より見る時、その四大さへも、空である、無である。人は、皆「かねてなき身」である。「かねてなき身」を「かねてある身」として、執着する。これ、無明である、愚痴である。煩惱である。

若し、這般の煩惱の雲を掃ひ除け、乃至、無明の闇を脱れ出て、「かねてなき身」を「かねてなき身」と知れば、生も、喜ぶに足らぬ。死も、憂ふるに足らぬ。死生存亡の外に優游して、暢氣に一生を送ることが出来る。これ、人間至上の幸福でなければならぬ。

三の二六 俳人涼菟胡蝶ごなる

◇予は、人間を愛せざるに非ず。自然に親しむの深きなり。「バイロン」

蕉門の俳人涼菟は、伊勢の神官である。或る年の春、近所の花を見に、草履穿きで、たゞ假初に、家を出た切り、幾日経つても、歸らない。人を出して、捜させても、判らない。一同、心配の折柄、一個月餘りで、やつと、歸宅した。聞けば、近所の花から、直ぐに思ひ立つて、京の東山へ行き、それより、播州須磨寺の櫻戀しく、又た、つかうかと、終に、長崎迄行つて来た、とのことであつた。

老後、危篤に及んで、門人等が、辭世を乞ふと、涼菟は、眼を開いて、合點ちや、そのあかつきの、子規

といひながら、繰り返して、「曉の、それあるべしや……」と、再案の聲が聞えた。これも俳人の乙由が、傍にゐて、

「この期に及んで、何の疑ひがあるものか。」そのあかつきの「……と、聲高に叫んだ。曾水といふが、筆を執つて記す時、正に、息が絶えた。

花を尋ねて長崎迄——この時、涼菟の心持ちは、花と一體不二であつた。花が涼菟か、涼菟が花か、一寸、判じかねた。人と花と、相合して、一幅の繪であつ

た。胡蝶は、己れを忘れて、花に戯れる。涼莧は、その身を胡蝶に成した。
し。際、是非の論は、無用である。たゞ、この俳人が、如何に、天然と親しむ
情の深かつたかを想ひやられればよい。

三の二七 括り猿

◇忍耐、以て、悪運に勝つべし。「ヴァーヂル」

天然で、獵師が、猿を捕るのに、谷間に遊んでゐる猿の前へ、鴉を丸めて投げ
しやると、ちよいと左の手で掴む、鴉が喰つ着いて離れない。驚いて、右の手を
かけると、それも、喰つ着いてしまふ。益す驚いて、右の足をかける。これも、
喰つ着く。左の足をかける。やはり、喰つ着いて、たゞ一丸めの鴉の爲めに、猿
は、さながらの括り猿になると、獵師は、それへ棒を通して、えつちらら、おつち
ら、擔ひ歸るとか。

無常の世である。變化の世である。物といふ物、事といふ事、一として、常住
なるはなく、時に刻々に變化して、長くは、同一状態を保たない。四時の循環
晝夜の代序は、いはすもがな、苦は、樂となり、樂は、苦となる、幸は、不幸と
なり、不幸は、幸となるの類、皆、無常の相を示す。まことに、

禍福は、縋へる繩の如し。

である。

であるから、幸福の、多く喜ぶに足りない如く、不幸も、多く憂ふるに足らぬ
稍や暫らく、その不幸に耐へてさへるれば、一陽來復、必らず、花咲く春もあ
る。

この際、藻掻くのは、禁物である。藻掻けば藻掻く程、苦痛を増し、不幸を加
へる。水に溺れる者が、藻掻いて、却つて、深味へ沈んで行くのと一般である。
じつと、心を落ちつけて、時節の到來を待つに如かぬ。

三の二八 知足と不知足

◇富貴は、求むる時苦しむ、守る時苦しむ、失ふ時苦しむ。「百縁經」

「汝等比丘、若し、諸ろの苦惱を脱れんと欲せば、當に、知足を觀すべし。知足の法は、則はち是れ、富樂、安穩の處なり。知足の人は、地上に臥すと雖も、猶ほ、安樂なり。不知足の者は、天堂に處ると雖も、亦た、意に稱はず。不知足の者は、富むと雖も、而も貧し。知足の人は、貧しと雖も、而も富む。不知足の者は、常に、五欲の爲に牽かれて、知足の者の爲めに、憐み慫まる。是れを知足と名く。」(百縁經)

足るのは、富むのである。足らぬのは、貧しいのである。而も、足ると足らぬは、心に在つて、物を有するの多少によらぬ。一物を有せずして、足る者がある

X X X

足れば、則はち、富むのである。富、巨萬を擁して、足らぬ者がある。足らなければ、これ、貧しいのである。金持ちの貧乏人がある。貧乏人の金持ちがある。彼れは、到底、此れの爲めに、憐み慫まれなければならぬ。足るを知らない心は、物に執着する心である。物に執着して、人間、物の奴隷である。身を養ふ爲めの金の爲めに、身を失ひ、心を樂しませる爲めの衣服、道具の爲めに、心を苦しめる。何の爲めの道具か、何の爲めの金か。古人の所謂る身を亡す所以のものを樂しむ。とは、彼等の事である。甚はだ、その意を解するに苦しむ。益す以て、憐み慫まれなければならぬ。

三の二九 まつ女の孝行

◇逆はぬ、風に柳の、言の葉で、たゞあいぐいと、いふが孝行。「古歌」

若狭の國三方郡豐濱村の農夫九右衛門の妻まつ女は、舅、姑に仕へて、至孝の名があり、安永元年五月、領主酒井修理大夫から、褒美の米を頂戴した上に、生涯、貢を免される由、恩命を賜はつた。

その行狀の一二をいふと、當時、まつ女は、十七を頭に、二歳迄、六人の子持ちであつたから、家の中の騒がしさは、耳を聳するばかりであつた。けれど、一言も叱らなかつた。人が、その理由を尋ねると、

「祖父母の身には、子よりも孫が可愛いと申します。その孫を吐つたのでは、舅姑の意に違ひます。ですから、已むを得ない時には、外へ連れ出して、いひ聞かせることにしてをります。」と答へた。

家は、貧乏であつたけれど、その様子を、曾つて、舅、姑に見せなかつた。

姑は、十年前、浮腫を病んで死んだ。その病中は、二便を始め、自ら、世話をして、人には手を觸れさせず、衣服、蒲團の汚れたのは、人目を忍んで、そつと濯ぎ、介抱、残る所がなかつた。

舅は、年八十に餘つたが、若い頃、江戸へ出て、どこかに奉公し、種々、見聞

した事を、思ひ出しては、皆に話した。それが、同じ話ばかりであつたので、何れも、聞き飽きてしまひ、誰れ一人、耳を傾ける者がなかつた。けれど、まつ女ののみは、

「へ、い、え、面白かつたでせう。」などいつては、舅を喜ばせた。

前にいふ通り、貧家の事で、衣服なども、充分ではなかつたので、夜寒の頃は一重の物も、舅に着せ、寝るには、先づ、舅の寢床へ入つて、自分の體で暖めた實家の父は、彦太夫といつて、相應に暮してゐたので、時々、食物などを贈ら

うとしたが、まつ女は、
「否、食ふ物は澤山です。」といつて、決して、受けなかつた。彦太夫は、我が子ながらも感心して、

「私には、子供が七人ある。その中でも、まつは、賢い者で、私でも、恥づかしと思ふことがある。」といつた。舅も、まつ女の孝行を喜んで、物語つた。これ等の行狀が、廣く世間に聞えて、遂に、領主の耳にも入り、御褒美に預かつたのである。

「逆はぬ、風に柳の、言の葉で、たゞあい／＼と、いふが孝行。」——孝行とて、難かしいことではない。何事も、たゞ、あいあいとのみ、親に逆はぬのが、孝行である。

勿論、敬遠主義を取るのではない。

觸らぬ神に、崇りなし。「日本俚諺」

とばかり、そつとして置くのではない。親の心を傷つけぬやう、痛めぬやう、身も安かれ、心も安かれと心がけ、色を和らげ、言葉を優しくして、靡き仕へるのである。

それも、附焼刃のあいあいでは困る。強ひてする従順では困る。親に對する同情の一念から、已むに已まされずして、それをするのでなければならぬ。

然り、同情である。至情である。誠である。人間の萬行、それが、誠の發露である時にのみ、善である。孝行、亦た、同斷でなければならぬ。

それ、誠である。誠は「勉めずして中り、思はずして得」(中庸)るものである。

心、誠にして、これを求むれば、中らずと雖も、遠からず。(大學)
である。親に對するに、同情を以てし、至情の已むを得ざる所に従へば、あいの孝行は、自然に勤まる。決して、難かしいものではない。

若し、孝行が、難かしいやうならば、それは、同情がないのである。至情がないのである。誠がないのである。須らく、自ら修省して、誠の人とならなければならぬ。誠は、道德の全般に亘る。誠があれば、道德があり、誠がなければ、道德はない。獨り、孝行の一事にのみ關はらないのである。

三の三〇 佐久間安次の謁見振り

◇質朴なのは、英雄の本色である。「マコーレー」

蒲生家に筮仕し、初めて、主人氏郷に謁した佐久間久右衛門安次、何うしたとか、墨の縁に躓いて倒れた。近習たちは、顔見合せて、笑ひを忍んだ。氏郷

それと知つて、

『これつ！ 久右衛門は、壘の上の奉公人ではないぞ。』と叱りつけた。

行儀、作法、素より、心得べきではあるが、抑も、本節である。丈夫、自ら、丈夫の本領がある。過まつて、壘の縁に躓くこと、丈夫たるに於て、何かあらん天下、國家を念とする者が、婦人を學んで、これ等の末節に拘々たること、吾等は、取らない。

三の三一 渴して水をのます

◇諸苦の因る所、貪慾を本と爲す。「法華經」

或る旅人、折柄、夏の事で、喉が渴いて仕方がない。不圖、野に炎陽の立つのを見るとき、

『あり難い！ 水がある。』と、その陽炎を追ふ中に、何時しか、大きな河の畔へ出た。が、ちつと見渡してゐるばかり、一杯掬つて、飲まうともしないので、傍の人が、

『お前さん、喉が渴くのなら、この水を飲んだらよからう。何をほんやりしてゐなさる？』

といふと、旅人の答へに、

『然やうさ。この水が飲み盡せるなら、飲みもしませうが、到底、飲み盡せさうにもありませんからね。』

物は、所有者の必要を充し得る限りに於て、価値がある。必要以外の物は、望むに足らぬ。これを得ると、これを失ふと、我れに於て、關する所はない。爲めに、心を勞するのは、愚である。痴である。

話の旅人は、必要以外の物の得られないことを理由に、必要な物迄捨てた。世間の慾張り屋は、必要な物を得て足らず、必要以外の物迄も、滅多矢鱈に掻き込

み、溜め込む。その行き方には、大分の相違があるが、必要以外の物の爲めに、心を勞するに至つては、彼れも、此れも、同一の愚者である。

四の一大福長者の致富訓

◇大欲は、無欲に似たり。「徒然草」

「或る大福長者の曰く、人は、萬づをさし置きて、ひたぶるに、徳をつくべきなり。貧しくては、生ける甲斐なし。富めるのみを人とす。徳をつかんと思はゞ、須らく、先づ、其の心づかひを修行すべし。

其の心といふは、他の事に非ず。人間、常住の思ひに住して、假りにも、無常を感じる事勿れ。

是れ、第一の用心なり。

次に、萬事の用を叶ふべからず。人の世にある、自他につけて、所願、無量なり。欲に従ひて、志を遂げんと思はゞ



とらめどいせ

すまふのふた

りふれん

けらな

の

百萬の錢ありといふとも、しばらくも、住すべからず。所願は、止む時なし。財は、盡くる期あり。限りある財を持ちて、限り無き願に従ふ事、得べからず。所願、心に萌す事あらば、我れを滅ほすべき惡念來れりと、固く、つゝしみ恐れて小用をも爲すべからず。

次に、錢を奴の如くして、使ひ用ひる物と知らば、長く、貧苦を免るべからず。君の如く、神の如く、畏れ尊みて、從へ用ひる事勿れ。

次に、耻ぢに臨むといふとも、怒り恨むる事勿れ。次に、正直にして、約を固くすべし。

此の義を守りて、利を求めん人は、富の來る事、火の乾けるに就き、水の、降れるに従ふが如くなるべし。錢積りて、盡きざる時は、宴飲、聲色を事とせず、居所を飾らず、所願を成せざれども、心、とこしなへに、安く樂し、と申しき。抑々、人は、所願を成せんが爲めに、財を求む。錢を財とする事は、願ひを叶ふるが故なり。所願あれども、叶へず、錢あれども、用るざらむは、全く、貧者と同じ。何をか樂とせん。此の掟は、只、人間の望みを絶ちて、貧をうれふべか

らずと、聞えたり。欲を爲して恃みとせんよりは、如かじ、財なからんには。痘を病む者は、水に洗ひて、恃みとせんよりは、病まざらんには如かじ。此の處に到りては、貧富、別つ所なし。究竟は、埋即に等し。大欲は、無欲に似たり。

(兼好法師)

大福長者も、「徳をつくべきなり。」といふ。所謂る徳は、道德の「徳」ではなくて、利得の「得」であるから、恐れ入る。

致富の用心、第一には、「人間、常住の思ひに住して、假りにも、無常を觀すること勿れ。」とは、如何？ この世は無常、今日あつて、明日なき命と觀じては、無理、非道をして迄も、金を溜める氣にはなるまい。世間の金持ちは、皆な、千年も、萬年も、生きるやうな顔をしてゐる。

次に、萬事の用を叶ふべからず。——食ひたい、着たい、見たい、遊びたいの「所願」心に萌すことあらば、我れを滅すべき惡念來れりと、固く、慎しみ恐れて、小用をも爲すべからず。——これでは、何の爲めの金だか、わけが解らない

然し「何の爲め」などと、疑問を起すやうでは、金持ちにはなれない。理由なしに、たゞたゞ、金を溜めるのである。

衣食の慾を制するどころか、熱さを忍び、身を害ふことをも忘れて、「爪に火を灯す。」ではないか。

「次に、錢を……君の如く、神の如く、畏れ尊べ」といふ。金錢の奴隷になれよといふのである。

恥ぢを忍べ、怒るな、正直にせよ、約束を守れ、といふ。結構である。但し、利害を計量しこの事、即ち、打算道徳なるもので、利害次第、この反對に出てもよい。

大福長者の致富訓、ざつと、斯くの如くである。斯くの如くにして、初めて金持ちになることが出来る。然らざれば、生涯、貧乏神の捕虜である。貧乏、決して、望ましいことではないが、それ程迄にして、金を溜めること、常人として、能く、忍び得る所であらうか。

況んや、斯くして溜めた金も、使ふ爲めの金ではなくて、たゞ、溜めて置く金

であるといふに至つては、さつぱり、わけが解らなくなる。使はない金は、石瓦も同然である。寧ろ、持たないも同然である。名は、金持ちといふけれど、實は宛然たる貧乏人である。果して、斯くの如くんば、兼好法師のいつてゐる通り、「欲を成して、樂みとせんよりは、如かじ、財なからんには。」である。最初から金を溜めない方がよい。

世界は廣い。解らないものの數ある中に、最も解らない、最も不思議なものは金持ちの心持ちである。

四の二 智恵伊豆 一生の不覺

◇念には念を入れよ。「日本俚諺」

松平伊豆守信綱は、世に「智恵伊豆」の目のあつた位る、稀代の智者であつたが、島原一揆の時には、一生の不覺を取つた。

明日は愈よ總攻撃、といふ前夜、令を各軍に傳へて、
「本陣で鐘をついたら、それを相圖に、一同、打ち立つやう。」と約束した。
退いて思ふに、

「今夜にも、敵の間者が忍び込んで、あの鐘を撞き、此方の裏を搔かうも知れぬ
それでは大變、事は、失敗に歸してしまふ。」といふので、撞木を外させ、自分の
手元へ運ばせた。

「これで大丈夫！」と思ふ下から、まだ、氣になる。

「鐘は、何でも撞ける。必らずしも、撞木を用ひない。」と、遂に、鐘を下させ
御丁寧にも、厳しく、菰を巻かせて置いた。

斯くて、一睡の夢も結び敢へぬ中、先陣の方で、俄かに、人馬が騒ぎ立つた。
忽ち、

「敵が、押し寄せました。」との注進に、かつばと跳ね起き、

「うむ、然うか。では、鐘をつけ。」と命じたが、鐘は、大地に下してある。剩け
に、菰が巻いてある。撞木も取り外してある。突嗟の間に合はない。

已むなく、ひた懸りに懸つて、漸く、敵を撃ち退けることは出来たが、信綱後
日の談に、

「いや、もう、取越苦勞をして、飛んだ不覺を取つた。」
とあつたとか。餘程、苦しんだものと見える。

古歌にいふ、

露の間も、ゆるす心や、行く水の、返らぬ悔いの、始めなるらん。

後悔は、失敗に由り、失敗は、油断に起り、油断は、小事に於てする。而も、
大事は、小事から起る。露と許すその露が、積り積つて、河ともなり、海ともな
れば、人は、小事にも油断せず、念に入れ、注意に注意を重ねて、後日の悔いか
ら免れるの用意、これ肝要である。

が、それにも、程度がある。注意も、過ぎたのは、猶豫になる。入念も、過ぎ
たのは、事の決行を妨げる。萬事に、念を入れた孔子も、魯の大夫季文子が、
三たび思ふて、而る後ち行ふ。「論語」

このことを聞くと、
再びすれば、斯れ、可なり。
と評した。何事も、過不及のない、中庸を守ることによつて、圓滿に行はれる。

四の三 中山勘解由の大決心

◇これに先んじ、これに勞す。「孔子」

大阪冬の陣後は、幕府の基礎も、漸く固く、天下は、追々、泰平の氣運に向つて來たが、上下、枕を高くして、安眠し得る迄には、なかなか、手間が取れた三代家光、四代家綱、五代綱吉と、時代は移つたが、盜賊、無頼の徒が、市中を横行して、夥しく、良民を苦しめた。旗本奴、町奴等の男伊達が、弱きを扶け強きを挫ぐと稱して、喧嘩を事とし、頻りに、暴威を揮つたのも、この頃である。要するに、當時の世間は、まだまだ、物騒を極めて、充分には、戰國氣分を脱し、

なかつたのである。
水野十郎左衛門、幡隨院長兵衛のいきさつは、やはり、この頃の事である。その十郎左衛門は、四代將軍の寶文四年三月、無作法の罪によつて、切腹を仰せつけられた。これを手初めに、幕府は、旗本奴の全部を召し捕つて、遠島、又は、追放に處した。

が、まだ、町奴が残つてゐる。こゝに於て、五代の貞享中、新たに、盜賊改役を拜命した中山勘解由は、就職早々、その、朝暮、崇信する佛壇を釘づけにして、「不肖勘解由、今度、盜賊改役を仰せつけられました。この身は、縦ひ、金輪、奈落に沈みませうとも、惡漢共を一掃して、大江戸八百八町の民が、夜も、戸を閉てずに寢られるやうにならぬ中は、再び、お目にはかゝりませぬ。」と誓ひ、一門、縁者へも、
『役儀の中は、先祖の年忌が來ても、一類中、病氣の者があつても、寺參りは致しません。前以て、御承知置きを願ひます。』と披露し、非常の決心を以て、町奴の逮捕に着手した。

先づ、お茶の水に住む大佛師三婦を縛し、その死を宥して目明とし、未だ、旬日ならざるに、唐犬權兵衛、放駒四郎兵衛、薩摩源五兵衛等、三十七人を召し捕り、それぞれ、吟味の上、その全部を、品川の鈴ヶ森に斬り、これを梟した。江戸の男伊達は、こゝに至つて、全然、その迹を絶つた。

勘解由の辣手は、更に、他の方面にも加へられ、市中、悪漢共、或ひは刑死し或ひは奔竄し、復た、良民を苦しめる者がなくなつた。勘解由の理想通り、大江戸八百八町の民は、爾來、枕を高くして眠ることが出来た。

人間、官吏となる。畢竟して、生活の手段かも知れぬ。酒屋が、酒を賣り、飯屋が、飯を賣るのと、趣意を同じうする事かも知れぬ。而も、古來、官吏を清職とし、他の職業と區別する所以は、生活の方便といふこと以外、併せて、國家、公共に奉ずるといふ、犠牲、獻身の意味のある職業であるからである。

であるから、凡そ、官吏たる者は、國家、公共に對する犠牲的觀念が、一般人以上に、強かるべきである。こゝにこそ、官吏の名譽があり、清職たる所以がある。

即ち、官吏は、犠牲的職業である。單に、二百、三百の月給を目的とする官吏があるならば、彼れは、己れの職業を辱かしむるものである。自ら悔るものである。去つて、酒屋になるがよい。飯屋になる方がよい。收入の點に於て、その方が、利方である。大臣、局長の受くる所も、一銀行、一會社の重役、支配人に及ばない。

が、今の世、清職の清職たる所以を解し、國家の爲め、公共の爲めなる犠牲的精神を以て、職務に當つてゐる官吏が、幾人あるか。すべて、不眞面目である。すべて、輕薄である。何か、人民から願つて出ても、早く處理して、便利を與へてやらう、との考へもなく、その日その日を、煙草で暮して、たゞ、給料日を指折り待つ。中山勘解由の決心と如何？

□重大なる、希望は、吾人をして、人たらしむ。

四の四 五重の樓

◇武夫の、矢走の渡し、近くとも、急がば廻れ、瀬田の長橋。「古歌」

近來、雨後の筍のやうに、によきによき、頭を擡げて來た成金の一人、屋敷の内に、五重の樓を建て、その上で、一大盛宴を張らうといふ、成金相應の野心を起し、大工を呼んで、

「大急ぎで建て、呉れ。大急ぎ！ 大急ぎ」といひつけた。

大工は、早速、着手して、先づ、地形に取りかゝつた。成金先生、合點が行かない。

「おいおい、何をするのだ？」

「はい、地形を作りますので……畢竟、五重の樓の下地でございます。」

「何、下地だと？ 俺は、下地なんかを頼みはしない。五重の樓の五重目が欲しい。」

「そのだ。五重目を建て、呉れ。」と責め、大工が、

「それを建てるには、第一に、地形を作つて、それから、一重目、二重目、三重目、と、下から順に建て、行くのでございます。」といふと。

「馬鹿つ！ 俺の望みは、五重目だ。四重目以下は、後から建てればいゝぢやないか。」

「それは、御無理で……。」

「何、無理だと？……へん、下から順に建てるのなら、俺にでも出来る。何も、お前に頼みはしないよ。」と哮え立て、少からず、大工を手早摺らせたとか。

事には、順序がある。順序を踏み、^X 一歩々々を堅實に運んで、^X 怠ることかなければ、千里の先へも到られる。一足飛びの成功は、能ふべくもない。

世間、この能ふべくない成功を望んで、結局、産を破り、家を失ひ、今更に、^X 兎町を怨み、^X 蠟鼓町を恨む者の少くないのは、何うしたことか。諺に、^X 人間、賢し。

といふけれど、人間、存外、愚かなものである。
若し、屋島の戦ひに、源義経は、船八艘を飛んだといふ。
虎は、千里の藪さへ越すに……

の謠もある。あてにはならない。あてにもなり、誰れにも出来、而も、最も確かな成功の策は、一步々々、足を運ぶに在る。この安全な道を捨て、彼の危険な路に由るのは、蓋し、迂遠を厭ふのである。が、近道、必らずしも、近道ではなく、本道、却つて、近道である場合が多い。「好んで捷徑を行ふ。」(孔子)は、小人の事である。思はなければならぬ。

四の五 中根東里の壁書

◇忠臣は、國ある事を知りて、家ある事を知らず。「中根東里」

「一、父母をいとをしみ、兄弟にむつまじきは、身を修むる本なり。本かたけれ

ば、末しけし。

一、老を敬ひ、幼をいつくしみ、有徳を貴び、無能をあはれむ。
一、忠臣は、國ある事を知つて、家ある事を知らず。孝子は、親ある事を知つて、己れある事を知らず。

一、先祖の祭をつししみ、子孫の教へを忽せにせず。
一、辭は、ゆるくして、誠ならん事を願ひ、行ひは、敏くして、厚つからんことを欲す。

一、善を見ては、法とし、不善を見ては、戒めとす。

一、怒りに、難を思へば、悔にいたらず。欲に、義を思へば、耻をとらず。

一、儉より奢に移る事は易く、奢より儉に入る事は難し。

一、樵夫は、山に登り、漁夫は、海に浮ぶ。人、各、その業を楽しむべし。

一、人の過ちをいはす。我が功にはほこらず。

一、病は、口より入るもの多し。禍は、口より出づるもの少からず。

一、施して、報を願はず。受けて、恩を忘れず。

- 一、他山の石は、玉をみかくべし。憂患の事は心をみかくべし。
- 一、水を飲んで、楽しむ者あり。錦を衣て、憂ふる者あり。
- 一、出づる月を待つべし。散る花を追ふこと勿れ。(中根東里)

X X X

每章、法とすべからざるはない中に、「忠臣は、國ある事を知つて、家ある事を知らず。」——全然、無我である。「孝子は、親ある事を知つて、己れある事を知らず。」——亦た、無我である。無我は、道の至極である。無我の善、即ち、眞の善である。誠といふもの、無我の善に外ならぬ。

彼の、内に、名利の慾を懐いて、外に、仁義、忠孝を行ふ者の如きは、到底、偽善者たるを免れない。

「怒りに難を思へば、悔に至らず。」——怒つて事をすれば、失敗して、困難に陥るは、必定である。これを思つて、怒りを忍ぶは、悔いなからしむる所以である。「慾に義を思へば、恥をしらず。」——孔子曰く、利を見て、義を思ふ。

と、亦た、この意である。

「儉より奢に移る事は易く、奢より儉に入る事は難し。」——たゞ賢者のみ、身の貴賤、家の食富に因つて、心を動かさず、終始一貫、儉素を守つて失はない。天命を知るからである。

「水を飲んで、楽しむ者あり。」——顔回は、その人である。孔子は、その人である。孔子曰く、

「疏食を飯ひ、水を飲み、脰を曲げて、これを枕とす。樂み、亦た、その中に在り。」

「錦を衣て、憂ふる者あり。」——小人は、皆、その人である。喜憂、苦樂、幸不幸は、心に在つて、物にはない。物に幸福を求める者は、物を得て、物に苦しむ物に使はれ、果ては、物の爲めに命を失ふことさへある。

「出づる月を待つべし。」——但し、靜かに待つべきである。時節が來れば、月は出るものに定まつてゐる。時節が來れば、夜は明ける。時節が來れば、雨は霽れる。時節が來れば、縦し、富貴とはいはない迄も、貧賤を脱することは出來やう。

時節に先だつて、焦躁り、藻掻いたとて、自ら苦しめる以外、何の効果もありはせぬ。「散る花を追ふ事勿れ。」——散る花を追ふのは、執着の爲である。

死んだ子の年數へ。「日本俚諺」

は、たゞ、涙の種である。焼けて灰になつた身上を悔むのは、悔み損である。これを執着といひ「念を留める」といふ。

念々の、塵と芥に、まとはれて、濁り江を出ぬ、人の果敢なさ。「脇坂義堂」とあるものを、然りとては、女々し過ぎやう。

四の六 矢田作十郎の「金鯉の兜」

◇猿にも衣裳。「日本俚諺」

赤穂義士の一人、矢田五郎右衛門の先祖矢田作十郎は、元龜、天正の頃、徳川家康に仕へ、三河武士の中でも、特に、剛勇の名があつた。石瀬の役に、敵の首

と併せて、その金鯉の兜を奪ひ取り、爾來、戦ひ毎に、それを冠つて出た。敵は一見、

「それ、金鯉が現はれたぞ。」といつて、怯ぢ懼れ、矢田の金鯉の兜」の名は、一時、敵、味方の間に鳴り響いた。

作十郎の同僚に、阿部四郎五郎といふがあつた。これ亦た、餘程の剛の者であつたが、或る日、作十郎を訪ねて来て、

「拙者も、貴殿にあやかりたい。就いては、一度、金鯉の兜を貸しては下さらぬか。次の軍には、是非、冠つて出たいから。」と請うた。作十郎は、苦り切つて、「貸しもしやう。けれど、貴殿のやうな卑怯者には、恐らく、似合ふまい。」と、ひどい挨拶をした。四郎五郎は、佛然として、

「何、卑怯者ぢやと？ その理由聞かう。」と、返辭によつては、決闘でもしさうな權幕である。

けれど、作十郎は、一向、平氣なもので、「確かに、卑怯ぢや。」

「何が卑怯ぢやう？」

「拙者は、戰場へ出る毎に、死を決して出る。然うあるべきで、生還を期して出る者があつたら、それは、必らず、卑怯者ぢや。貴殿は、今、あの兜を貸せといはるゝ。生きて還つて、返す心があるのであらう。即ち、卑怯ではないか。何故、くれよといはれぬか。」所謂の卑怯の意味を、斯くと説明した。

理の當然に、四郎五郎は、怒りを収め、改めて、金鯉の兜を譲り受けた。

そして、その後の戦ひには、何時も、それを冠つて出た。兜は、同じ兜ながら主が違ふ、人が違ふ。最初の中は、敵を恐れさせたが、時の経つに連れて、却つて、その侮りを受けるやうになつた。金鯉の兜も、斯なつては、最早、名譽の物でもない。

四郎五郎も、詰らなく感じたのか、後ち、作十郎へ返却に及んだ。作十郎は、「鯉は死んだ。」とばかり、再び冠らうとはしなかつた。

自分の兜で出るがよい。自分の素顔で出るがよい。小人を以て、君子の假面を

冠り、無學者を以て、學者の假面を冠り、貧乏人を以て、金持ちの假面を冠り、公盗を以て、政治家の假面を冠り、生臭を以て、宗教家の假面を冠り、御用商人の番頭を以て、官吏の假面を冠つた所で、その假面、何時かは、剥がれずにならぬ。「猿にも衣裳。」といふけれど、永く、世間を欺くには足らぬ。

四の七 阿部家の浪人

◇武士は、食はねど、高楊枝。「日本俚諺」

江戸八丁堀の、方ある裏家に住んだ一人の浪人、元と、阿部豊後守忠秋の家で物頭を勤めたのが、仔細あつて、暇を取つた者とか。何一つ、生業のない身とて年を経るに従ひ、次第に貧乏して、果ては、糧も絶え絶えの有様に、家主は、見かねて、稍や久しく、朝夕の物を贈つてやつてゐた。する中に、浪人は、

『病氣になつた。』といつて、外へも出なくなつた。家主は、人に持たせて、粥などを贈つた。けれど、浪人は、

『不食の病ひぢやから……』と、それを受けず、剩へ、戸を鎖してしまつた。家主は、毎日、外から聲をかけて、病氣を尋ねた。最初の中は、返辭があつたが、後には、何の言葉も聞えなくなつた。

これは不思議と、家主は、近所の者を連れ、戸を破つて、入つて見た。すると浪人は、具足櫃に寄りかかり、膝に大小を横へ、簀子の上に菰を敷き、その上に坐つた儘、死んでゐた。

傍に、一通の遺書があつた。披いて見ると、先づ、年來受けた、家主の恩を忘れぬ由を書し、寺への遣はし物、家賃のまだ濟まない分を、この金で取つてくれるやうと、金が添へてあつた。

具足櫃の中には、輝く鎧一領、外に、黄金三枚、入れてあつた。大小の仕立も古くこそあれ、皆、金拵への儘であつた。而も、衣服は、身につけた一枚の外にはなく、その他、鍋もなければ、釜もな

い。こゝ、百日ばかりの間、食物をしたゝめた様子が見えなかつた。

所で、この始末は、私には計へない。町奉行へ届けると、

『その者の、遺書通りに沙汰せよ。』との事であつた。

舊主人忠秋は、後日、この事を聞くと、

『さては、餓死したか。不便な事ぢや。』と、哀れがつたとか。

X X X

浪人は、何故、自ら、死を速めたか、その心中を察するに、生業のない浪人生活、それも、久しきに亘つては、最早、餘財とてもない。今日迄は、衣類、諸道具、鍋、釜に至る迄、金に換へて、命を繋いで來たが、それも盡きた。といつて

忠臣は、二君に事へず。

の格言もある。他家へ走つて、祿を受けるには忍びない。今は、この世に望みのない身、何を恃みに生きてるやう？ この上、生を偷まうとすれば、鎧も、大小も、手放さなければならぬ。それでは、武士が廢る。武士の嗜みを何とする？ 大恩ある家主へも、彌が上に、迷惑をかけなければならぬ。今ならば、武士とし

て死ぬことが出来る。寺への遣はしものもある。家主へ損をさせずに済む。

『死ぬなら今だ。』と決心し、餓死を求めたものに相違ない。

普通の人情からすれば、死なくても済んだのである。人間、困窮のどん底に落ち、死ぬか生きるかの境ひになれば、何んな事でもする。兄弟、相食むやうな事でもする。他人の財物を掠める位は、罪の軽い方かも知れぬ。

が、それは、普通の人情である。窮して濫する小人の心持ちである。孟子曰く生は、我が欲する所なり。義も、亦た、我が欲する所なり。二つのもの、兼ねるを得べからずんば、生を棄て、義を取らんものなり。

と。斯くあるのが、本當である。死生は、一身の私事である。道義は、天下の公器である。私を以て、公を廢するわけには行かぬ。困窮を理由に、悪事を營む者は、そこに、恕すべき理由はあらう。その人、決して、無罪の人ではない。人に責ぶ所は、死生、窮達によつて、守る所を失はないに在るが、さて、小人には難かしい。

浪人は、この難かしい所を、而も見事に、やつて除けた。死に至る迄、武士の

本領、嗜みを失はなかつたその操守、人に迷惑をかけじとしたその高義は、たゞたゞ、敬服の外はない。寧ろ、驚嘆の外はない。

若しそれ、家主が、その店子に對する温情に至つては、殆んど、稀有である。彼れ、恐らく、市井の一人人に過ぎなかつたのである。營利を事とする商人に、彼の俠行があつたのは、人の徳か、時代の徳か。今の家主ならば、力づくで追ひ出した上に、跡を釘づけにでもするのであらう。

四の八日本一の名馬

◇自慢、高慢、馬鹿の中。「日本俚諺」

二階の窓から、街上を見下してゐる二人の一人、
「君、向ふの曲り角に、馬がゐるだらう？ 君の目に見えるかね。」
「馬が見えなくて、何うするかい？」

「見えるのだね?」

「見えるよ。」

「ちや、君は、幸福だ。喜び給へ。」

「何が幸福だ?」

「君は、日本一の名馬を見たといふものだ。」

「あれが、日本一の馬かね。」

「然うよ。見給へ、脊、恰好から、脚のすりりとした工合!」

「立派なものだぜ。」

「い、馬ぢやあるが、あれ位るのは、他に、幾らもあるだらう?」

「何うして! 日本一、飛び切りの名馬だ。」

「ちや、君は、あの馬の持主を知つてるのだね?」

「知つてるともさ!」

「斯くいふ僕の馬だもの。」

「君の馬か。」

「驚いたらう?」と得意になつて、

「所で、君、自慢ぢやないが、僕の厩には、もつといふ馬が、五匹も六匹もゐるのだぜ。」

これを稱して、矛盾といひ、自家撞着といふ。

諺に、「自慢、高慢、馬鹿の中。」或ひは、

自慢は、智慧の行き止り。

などいふけれど、人は、左右、自慢したがらる。學問を自慢し、技藝を自慢し、腕力を自慢し、健脚を自慢するなどはまだしも、財産を自慢し、官位を自慢し、家の系圖を自慢し、道具を自慢し、衣服を自慢し、持ち物を自慢し、自慢の鼻を齧めかすなどは、滑稽至極である。財産は、財産である。人でない。乃至、持ち物は、持ち物である。人ではない。多分の財産を貯へた所で、小人は、小人である。馬鹿は、馬鹿である。立派な物を持つた所で、下らない人は、やはり、下らない人である。偉くとも何ともない。何の自慢になるものか。物に於て自慢するのは、人間としての下らなさを自白するに外ならぬと知れ。

これ、自慢すべきを自慢しないで、自慢すべからざるを自慢するのである。自慢すべきもの、如何？ 何故、人格を自慢せぬか、人物を自慢せぬか。品性を自慢せぬか。これならば、自慢すべき理由があらう。尤も、眞に、人格の高い人は自慢などいふ、馬鹿けた、子供らしい眞似をしないけれど……

四の九 自ら知る こと

◇己れを知れ。「チロー」

「高倉院の法華堂の三昧僧、某の律師とかやいふ者、或る時、鏡を取りて、顔を、熱くと見て、我が貌の醜く、浅猿しきことを、餘り心憂く覺えて、鏡さへ疎ましき心地しければ、其の後、長く、鏡を怖れて、手にだに取らず、更に、人に交はることなし、御堂の勤めばかりに逢ひて、籠りたりと聞き侍りしこそ、あり難く覺えしか。

賢げなる人も、人の上をのみ度りて、己れをば知らざるなり。我れを知らずして、外を知るといふ理あるべからず。されば、己れを知るを、物を知れる人といふべし。

貌、醜けれども知らず。心の愚かなるをも知らず、藝の拙きをも知らず、躬の数ならぬをも知らず。年の老いあるをも知らず、病ひの侵すをも知らず、死の近きことをも知らず、行ふ道の至らざるをも知らず、身の上の非を知らねば、況して、外の毀りを知らず。

但し、貌は、鏡に見ゆ。年は、算へて知る。我が身の事知らぬにはあらねど、すべき方の無ければ、知らぬに似たりとぞいはまし。貌を改め、齡ひを若くせよとにはあらず。拙きを知らば、何ぞ、頓て退かざる。老いぬと知らば、何ぞ、閑かに、身を安くせざる。行ひおろかなりと知らば、何ぞ、これを思ふ事、これにあらざる。

すべて、人に愛求せられずして、衆に交はるは、耻ぢなり。貌醜く、心おくれにして、出で仕へ、無智にして、大才に交はり、不堪の藝を持て、堪能の座に

列なり、雪の頭を戴きて、壯なる人に列び、況んや、及ばざる事を望み、叶はぬ事を愁へ、來らざる事を待ち、人に恐れ、人に媚ぶるは、人の與ふる耻にあらず貪る心に引かれて、自ら、身を辱しむる也。
貪ることの止まざるは、命を終ふる大事、今、こゝに來れりと、確かに知らざればなり。」(徒然草)

高倉院の某の律師は、我が貌の醜さに、「鏡を怖れて、手にだに取らず、更に人に交はることなし。」と、引き籠つてばかりゐた。貌の醜さを恥ぢる人が、心の醜さを恥ぢないのは、如何？ 恥つべからざるを恥ぢて、恥づべきを恥ぢないのは、如何？

我が心、鏡にかけて、見るならば、嘸や姿の、醜かるらん。
斯うした醜い心を持ちながら、臆面もなく、人中へ出るさへあるに、金持ち顔をし、學者面をし、才子、腕利きと己惚れ、官位、爵祿を笠に被て、下目に見るなどは、身知らずの骨頂である。

然り、身知らずである。小人は、自ら知らない。人を左や右いふ辭に、目、目を見ず。指、指を指さず。

で、自分に就いては、一切、ちんぷんかんである。

善し悪しの、人を見る目を、持ちながら、我が身の上は、烏羽玉の闇。

といふもの、これ、小人の常態である。

が、人は、自ら知らなければならぬ。何を指しても、自分自身を知らなければ

ならぬ。ソクラテスは、遇ふ人毎に、

己れ自身を知れ。

といつて、その反省自改を促したとか。チローの語は、冒頭に掲げた。ポーブ

も、

己れを知れ……人間の當に研究すべき題目は、人間なり。

といつてゐる。

多くの善きものは、自ら知る間から生じて来る。仁義、忠孝、雅量、誠實、清廉、謙遜、博愛、忍耐、節儉の諸美德は、たゞ、自ら知る人のみのものである。

反省自改の機會も、これに依つて捉へられる。ソクラテスと親睦した一人は、「かの人と話してゐると、知らず識らず、頭が熱し、心臓の鼓動が高くなり、つひ、感涙が催される。そして、自分の從來の處世法の間違つてゐたこと、現在の考への誤つてゐることが痛感せられ、將來も、この儘で押し通して行く位なら自分の今後の生存は、全然、無意味の事であるやうに思はれてならなかつた。」と述懐してゐる。今の世、人類の師とも稱すべき偉人、ソクラテスのないことを遺憾とするが、又た思ふに、必らずしも、ソクラテスを俟たぬ。釋迦、孔子、基督を俟たぬ。我々に供せらるゝ自改の機會は、我々の足下に在る。「自ら知る」といふことである。

小人は、皆貪る、自ら知らないが爲めである。「貪ることの止まざるは、命を終ふる大事、今、こゝに來れりと、確かに知らざればなり。」の一句、以て、今の貪慾漢を戒しむるに足らぬか。

四の一〇 阿部忠秋鶉を放つ

◇寫るとは、水も思はず、寫すとは、月も思はぬ、猿澤の池。「古歌」

萬治、寛文の頃、鶉が流行つて、高貴の家では、競つて飼ひ、互ひに、聲のよいのを自慢し合つた。自然、値段も、頻りに騰貴した。

老中阿部豊後守忠秋も、鶉好きの一人で、常に、籠を側に置き、鳴き聲を楽しんだ。或る諸侯が、それを聞くとその頃、世に隠れのない鶉を、大金で買ひ取り典醫の某を以て、

「この程、珍しい鶉を求めました。お慰みに、進上いたしたい。」といはせた。悦ぶと思ひの外、豊後守は、

「先方へ、よく心得て……」とばかり、左右の返辭をせぬ。某が、不思議に思つてゐると、豊後守は、やがて、近習の者を呼んで

「鶉籠の口を、全部、庭の方へ向けよ。」
と命じ、更に、籠の口を開けさせた。鶉は、先を争つて、籠を飛び出し、一羽残らず、飛び去つた。

典醫は、益す、不思議である。

「お手馴れた鳥で、復び歸つて来るのでござりまするか。」と問うた。豊後守は、「否、然うではない、今日限り、放してやつたのぢや。さて、序でながらいふが自分のやうに、上の御威光によつて、人に執し思はれる身では、物好みをするものではない。自分が、この頃、ふと、鶉を飼ふと、最早、そんなことをいふ人もある。今後は、きつと、鶉好きを止める。」と答へた。この言葉に、某は、手持ちなく歸つたとか。

人は、左右、好む所に依つて、身を誤まる。名を好む者は、名の爲めに、危険を冒して、あたら、命を棒に揮る。利を好む者は、利の爲めに、義理、人情を忘れて、世間の指弾を受ける。酒を好む者は、酒の爲めに、家業を怠り、女房、子供に孤を被せる。色を好む者は、色の爲めに、常識を失ひ、傾城の、涙で家の、屋根が洩り。

吉原が、明るくなれば、家は闇。

の破滅にも至る。皆、好む所に依つて、身を誤まるのである。

と。であるから、好むのは、宜しくない。
腹蛇、一たび、手を整せば、壯士、疾く、劍を解く。「陸龜蒙」
あるやうに、我が好みを、一刀兩断し去るのは、處世上、大切な心がけの一つである。

が、何等、好む所なく、枯木死灰の心持ちになつて、世を渡るのは、我々小人に取つて、堪へ切れないかも知れぬ。餘りに殺風景のやうでもある。好むといふこと、成程、身を誤まるの因ではあるが、又た、幸福の要素でもある。これに處すること、如何？

思ふに、好むのが、悪いのではない。好み方の悪いのが、悪いのである。即ち、好む所に囚はれるのが、悪いのである。囚はれず、執着せず、好むのなら、

好むこと、避けるに足らぬ。番に、身を誤まるの因たるに足らぬのみではなく、確かに、人生の一大幸福である。

例へば、酒を好むのはよい。飲まずにゐられない、といふのでは、酒に囚はれてゐるので、その事、苦痛でもあれば、身を誤まる原因にもなる。

「酒は、止められるが、煙草は、何うも……と」いふのでは、煙草に囚はれてゐるのである。甚はだ宜しくない。

その他、名を好んで、名に囚はれず、利を好んで、利に囚はれず、色を好んで色に囚はれず、得べくんば、得て樂しむ、棄つべくんば、棄て、惜しまない——これを、好むの善きものとする。

四の二一 けん女の忠孝

◇忠臣は、孝子の門に出づ。「日本俚諺」

三河の國幡豆郡深池村の農夫甚平の娘けん女は、幼時、父を失ひ、家の貧苦にそこそこ、へ子守奉公に行き、最後には、明和四年頃、上今川村の清七といふへ雇はれた。主人の氣にも入り、年久しく仕へる中、清七夫婦に、その子供等も、相踵いで死に、清七の姉一人限りになつたが、見捨てるに忍びず、後には、給金の定めもなく、依然、主家に留まつた。

けん女の母は、至つて丈夫な人で、老の手業に、絲を繰つた。繰り溜ると、けん女が行つては、機を織る。一反なれば、その日に織り、二反なれば、夜をこめて織り、織り上げたのを、近所の親類を頼んで賣り、綿、米などに代へて、母に送つた。

又た、薪は、主人の家に貯へて置いて、毎朝、二三把つゝ、十町に餘る道を、母の許へ持ち運んで、而も、主人の事を缺かなかつた。

それを見る人は、

「お前の孝行は、何とも、感心の外はない。寧ろ、阿母と一緒に暮したら何うかね？」といつたが、けん女は、

『ですけれど、今更、主人を見捨てることも出来ませんから……』と答へた。
その他、何か珍しい物があると、母に送り、主人から與へられる仕着せも、
母に着せて、自分は、古い物のみを着るなど、忠孝の行ひ、世の常でなかつたの
で、寛政三年、領主から、褒美の米を與へられた。

人は、たゞ一つの誠を以てして、道を行ふことが出来る。而も、道の全般を行
ふことが出来る。

誠は、至情である。天の賦與する所、自然にして、人に具はるものである。自
然である。學問に由らぬ、智慧に由らぬ。智慧や學問は、以て、名利の雑念を掃
ひ去り、誠をして、能く、その光輝を發揮せしむるに足るが、時としては、反對
に、誠を遮るることさへある。學者に、偽り者の多く、智者に、ごまかし屋の少か
らざるは、古來の通患とする所である。へたな學問は、無學に如かぬ。へたな智
慧は、無智に如かぬ。

賢きは、我が身の爲めの、かたきなり。愚かになれば、住よしの神。

而も、道は、この誠によつて行はれる。無學、無智は、無道德を意味せぬ。人
間、自ら具はる至情のある限り——誠のある限り、以て、道を行ふに堪へる。
學問、智慧などに俟つものではない。中庸に、

誠は、思はずして中り、勉めずして得。

とあつて、誠を以てする時、道は、自然にして行はれる。

古往今來、眞の忠は、眞の孝子といはれる人が、大部分、無學、無智、例へば
けん女の如き人であること、以て、證するに足る。若し、道が、學問や智慧に依
つて行はれるものであるならば、けん女などは、不忠、不孝の名をこそ殘せ、忠
孝の人ではあり得なかつた筈である。

道は、誠によつて、行はれる。而も、縦横無礙に行はれる。五倫、五常と、道
は、多端に岐れるけれど、これを行ふ所以の心は、たゞ一つである。たゞ一つの
誠である。「誠は、思はずして中り、勉めずして得。」——それは、道の全般に中る
のである。道のすべてを得るのである。

であるから、古來、忠臣を求めざる者は、孝子の門に於てする。忠も、誠に依つ

て、行はれる。孝も、誠に依つて、行はれる。忠と、孝と、道は違ふが、これ行ふ心持ちは、等しく、誠である。君に事ふるに誠を以てすれば、忠となり、親に事ふるに、誠を以てすれば、孝となる。「忠孝兩善」といふ。忠孝は、兩善なるべきものである。

例へば、けん女の如くである。
豈に、番に、忠孝兩全のみならんや。十徳十全、百徳百全は、誠の道である。

四の一二 焼けた父

◇天は、自ら助ける者を助ける。「英國俚諺」

或る人、旅行するに就いて、少々、足りない息子に、
「俺の不在中に、客があつたら、お父さんは、用事があつて、四五日の豫定で、大阪へ往きました、といふんだよ。」といひ聞かせ、尙ほ、

「お前は、記憶が悪い。忘れたら、これを見ろ。」と、その口上を、紙片に書いて渡し、後では、息子、その紙片を袂に入れ、時々、取り出しては、見てゐたが、その翌日も、その翌日も、誰れも、訪ねて来る者が無い。四五日目になつて、
「えい、こんな紙なんか、要りやしない。」と、火鉢へくべてしまふと、間もなく客があつて、

「お父さんは？」と訊く。

「はい……」と答へやうとして、袂の中を探つて見て、

「なくなりました。」

「お亡くなり？ 驚きましたねえ。何時です？」

と、呆れ顔にいふと、

「つひ、先刻、焼きました。」

我々は、常に、何物、何事に於て、
持む所がある。主人は、家來を
持み、家來は、主人を
持む。親は、子を
持み、子は、親を
持む。財産を
持み、家柄を
持み

地位を恃み、官位を恃む。船に乗る者は、船を恃む。馬に乗る者は、馬を恃む。夫妻、相恃み、兄弟、相恃み、朋友、相恃み、知人、相恃み、恃み恃んで、「これなら大丈夫！ 何事が起らうとも、優に、その助けを藉ることが出来る。」と安心する。

恃みになるか、助けになるか「甚はだ、覺束ないものではある。主人は、家來を恃む。その家來、案外にも、

大奸は、忠に似たり。「孝子」

の類ひかも知れぬ。家來は、主人を恃む。而も、反覆、常なきものは、人の情である。

太行の路、能く、車を摧くも、若し、人心に比すれば。これ坦途。巫峽の水能く、舟を覆すも、若し、人心に比すれば、これ安流。「白樂天」

である。恩賞を期待して、却つて、遠けられ、斥けられまいものでもない。恃む子に先だ、れて泣く親もあれば、恃む親を失つて、愕然、茫然たる子もある。財産を恃むのは、小人の常とする所で、

「家内安全、子孫長久、これで、命が、百返も續けば……」と、得意になつてゐる所へ、忽ち起る大震大火災、家も、倉も、灰になつてしまふなどの例は、決して、稀有とはせぬ。何が、恃まれやう？ 何が、助けにならう？

世に、大丈夫、確かとして、恃み得るものは、何一つ、ありはせぬ。

この間に在つて、比較的、恃み得るものは、自分自身である。それとても、「比較的」である。人が、天地の間に在るさまは、殆んど、大海の一粟である。五尺の身、五十年の命は、微々、いふに足るものではないが、尙ほ、物を恃み。他人を恃むには優る。恃むべくんば、自ら恃むがよい。自分の學識、自分の才智、手腕、技藝を恃みに、世を渡るのは、物や他人を恃むに比すれば、何程か、安全であらう。

紙片を恃んだ馬鹿息子は、紙片をなくして、返辭に困しんだ。他人を恃む者は、他人の心變りに因つて、狼狽しなければならぬ。物を恃む者は、物を失つて、胸を打たなければならぬ。

四の二三 吉田松陰の士規七則

◇士の道は、義より大なるはなし。「吉田松陰」

「一、凡そ、生れて人となる、宜しく、人の禽獸に異なる所以を知べし。蓋し、人に五倫あり。而して、君臣、父子を、最も大なりとす。故に、人の人たる所以は、忠孝を本と爲す。」

一、凡そ、皇國に生る、宜しく、吾れの字内に尊き所以を知るべし。蓋し、皇朝は、萬葉一統にして、邦國の士夫も、世々、祿位を襲ぐ。人君は、民を養ふを以て、祖業を續ぎ。臣民は、君に忠にして、以て、父の志を繼ぐ。君臣一體、忠孝一致なるは、唯だ、吾國を然とす。

一、士の道は、義より大なるはなし。義は、勇によりて行はれ、勇は、義によりて長ず。

一、士の行ひは、質實、欺かざるを以て、要と爲す。巧話にして、過ちを交るを以て、耻ぢと爲す。公明正大は、皆、これより出づ。

一、人、古今に通ぜず、聖賢を師とせざれば、則ち、鄙夫のみ。讀書、尙友は、君子の事なり。

一、徳を成し、材を達するは、師友の恩、多きに居る。故に、君子は、交遊を慎む。

一、死而後己の四字は、言、簡にして、義、廣し。堅忍果決、確乎として、拔くべからざるもの、是を捨て、術なきなり。

右士規七則、約して三端となす、曰く、志を立て、以て、萬事の源となす。交りを選んで、以て、仁義の行ひを輔く。書を読み、以て、聖賢の訓へを稽ふ。士、苟くも、此に得るあらば、亦た以て。成人と爲すべし。(吉田松陰)

吉田松陰の士規七則は、武士道の精神を要約したもので、必らずしも、松陰の一家言ではない、従つて、特に、目新しい點もないが、直ちに、我々今日の修

養訓に用ひ得ることを感謝する。

封建時代に在つて、社會の中堅を成したものは、武士である。幕末武士の大部分が、下らない代物のみであつたこと、所謂生くら武士のみであつたことは、論のない所である。その間、生來、武士道に依つて教養せられ、武士道の精神を精神として、自ら恥かしめなかつた武士も、絶無ではなかつた。明治維新の大業は、實に、それ等の武士の力に俟つて、能く、大成を見たのである。

今の世、武士なる階級はない。それは、些か、惜しむに足らぬが、惜しむべきは、武士の階級と共に、武士道の失はれたことである。

否、武士道に代るべき新道德の、今尙ほ、發生するに至らないことである。今日、社會の中堅を成すものは、實業家であらう。彼等に、何の道德があるか。彼等にも、營利道がある。けれど、それは、道德ではない。

武士には、武士道があつた。商人にも、商人道があるべきである、然るに、今の商人は、金儲けにのみ専心一意して、殆んど、道德を顧慮しない。農民にも、農民道があるべきである。然るに、今の農民は、米價の高からんことをこれ望ん

で、大概、道德を問題にしない。斯くて、萬人、争利を事とし、嗜み合ひ、食ひ合ひ、摺み合ひの修羅場暮しといふのが、社會の現状である。

今の急務は、昔の武士道に代るべき、商人道を興すに在る。農民道を興すに在る。

因つて思ふに、人道を外にして、武士道はない。武士道は、人道の裡に包括せらるべきものである。廣汎なる人道の或る方面、即ち、武士に必要なものが特に發達して、こゝに、武士道を生じた迄である。

従つて、武士道の精神は、又た、人道の精神である。姑らく、商人道、農民道に假り用ひて、自然の改易を待つこと、何の差支もないであらう。これ、實業家の則るべき新道德を定立する所以の途である。

果して然らば、武士道、研究しなければならぬ。土規七則、誦するに足る。「士道の道は、義より大なるはなし。」といふが如き、

商人、利を重んじて、別離を輕んず。「白樂天」と歌はれ、利を見て、義を知らないといふのを、通り相場にされてゐる商人の

爲めに、好個の修養資料を供するものでなければならぬ。

四の一四 豊公の鶴逸す

◇海濶うして、魚の躍るに従ひ、天空しうして、鳥の飛ぶに任す。「林羅山」

豊太閤秀吉の飼つてゐた鶴が、或る時、籠から逃げ出した。係りの者が、恐る、その由を報告すると、秀吉は、

「異國へ逃げやうか。」と尋ねた。

「飼ひ鳥のことで、そんなに遠方へは、得参りませうまい。」

「それなら、放つて置け。日本中にゐるのなら、やはり、予の籠の中ぢや。」といつて、別に咎めもしなかつた。

流石は英雄、豊太閤の度量は廣かつた。一身をのみ我れとし、一家これ執して

眼、他人に及ばない、豆粒的小人に比すれば、雲泥の差である。
が、まだまだ、至つたものではない。次を見よ。

四の一五 楚王弓を亡ふ

◇人弓を遺す人これを得んのみ。「家語」

楚の恭王が、狩りに出て、烏嗥の弓を亡つた。左右の者が、

「捜しませう。」といふと、王は

「止めよ。楚の王の失つた弓は、やはり、楚の人が、拾ふのであらう。損得はない。捜すには及ばぬ。」といつて、それを遮ぎつた。

この事、後ち、孔子の耳へ入つた。孔子は、評して、

「惜しいことには、了簡が小さい。人の失つた弓は、人が得る迄で、損得はないと斯ういへばよいのぢや。必らずしも、楚のみではない。」

惜しいかな、その大ならざるや。人、弓を遺す。人、これを得んのみ、といはざる。何ぞ、必らずしも、楚のみならん。といつた。

太閤は、鶴を失ひ、楚王は、弓を失つた。太閤は、鶴の、他國に逃れざるべきを以て安心し。楚王は、弓の、亦た、楚人の手に歸すべきを以て安心した。その事、相似て、その心、符節を合するが如くである。海淵の度、天空の量、優に、弓の躍るに従ひ、鶴の飛ぶに任するに足るか。

蓋、太閤は、「日本」をいひ、楚王は「楚」をいつた。その心たる、猶ほ、限らるゝ所があつたのである。楚王の言を惜しんだ孔子、若し、太閤の言を聞いたならば、同様の辭を以て、これを評するであらう。曰く、「惜しいかな、その大ならざるや。人、鶴を失ふ。人、これを得んのみ、といはざる。何ぞ、必らずしも、日本のみならん。」と。

が、吾等は、孔子の評にも、不満がある。抑も、物を失ふとは、如何？ 古來

裸で物を落した例しはない。持てばこそ、失ふのである。持つ所がなければ、失ふ所もない。物を失つて、捜すよりも、最初から、物を持たない方がよい。失ふこともなく、捜すも世話もないであらう。

物を持たないといふ。裸であるの意ではない。無一物であるの意ではない。物を持つ。財産を持つ。家を持つ。屋敷を持つ。衣類、諸道具、人並には持つ。たゞ、持つても、持たない如くに持つのである。即ち、物に執着しないのである。物に執着しなければ、家が、焼けて灰になつても、衣類が、泥坊の手に渡つても、少しも、惜しむ心はない。他人の事でもあるやうに、平然として、澄し込まれる。これ、持たない如くに持つのである。

將た、失はない如くに失ふのである。

老子は、よく、この間の消息を知つてゐた。その語に、萬物、作りて、辭せず。生じて、有せず。爲して、恃まず。功成りて、居らず。それ、たゞ、居らず。こゝを以て、去らず。といへる、味ふべきである。

斯くの如くならば、得失の論はない。失ふの、拾ふのといふがものはない。太閤が、日本をいひ、楚王が、楚をいつたのを不満とした孔子も一人、弓を遺す。人、これを得んのみといはざる。」との評から見ると、まだまだ、失はず、拾はず遺さず、得ずの至處には、行き着くことが出来なかつたのであらう。吾等は、それを遺憾とする。

四の一六 玩具の牛を作る男

◇勞して、功なし。「日本俚諺」

或る男、約そ一抱えもあらうといふ大きな石を、山から採つて来て、今日も、明日も、せつせと磨く。

「何うするのか。」と尋ねると、

「少し考へがあつてね。」と、仔細ありけに、につこりする。

二三年もすると、石は、大分、小さくなつた。然し、了簡が解らない。

「ねえ、君、何うする心組？」と、重ねて尋ねても、

「少し、考へがあつてね。」と、前の言葉を繰り返すばかり。

「解らないねえ。」

「まあ、黙つて見て、呉れよ。細工は流々、仕上げを御覧じだ。」と笑つて、磨き續けること七年、漸と出来上つたのを見ると、何の事、小ほけな玩具の牛！

人は、勞力の、極めて大なるに對して、結果の、餘りに小なるを思つて、苦笑せずにもられなかつた。

然し、我々小人のする事は、大概、これではあるまいか。

物心がついて以來、金、金、金、金と、思ふ所は、金ばかり。今日も、明日もと、金を儲け、金を溜める。番に、七年のみではない。その間の勞力、苦心も、石を磨くの比ではない。商略と稱しては、羊頭狗肉の奸策を弄び、駈引と號しては、世を詐り、人を欺く、人、亦た、欺かれて止むものならねば、これを怒り、

これを怨み、報ゆるに、強慾漢、非道者の名を以てするが、此方は、一向に無關心、愈よ、強慾の爪を研ぎ、益す、非道の牙を磨く、斯くて、頭上、霜を戴く頃十萬、二十萬の財産が出来上ると、我れも、人も、目するに成功者を以てする。成功者が、成功者か。

富が、聚まると、人は、衰へる。「ゴールドスミス」

富は、たゞ、我々に衣食と火とを與へるに過ぎぬ。「ポーブ」

不義にして、富み、且つ、貴きは、我れに於て、浮雲の如し。「孔子」

駱駝の、針の孔を通るは、富者の天國に入るよりは易し。「基督」

富貴、利達を極めてる人は、眞に、我が身を知らないのである。

「ペーコン」

賢き人の、富めるは稀れなり。「兼好」

東西の智者、古今の賢人が、富を見る眼は、斯くの如くである。富の價値は、玩具の牛、それよりも劣る。富む者が、成功者ならば、研磨七年、玩具の牛を造つた愚人も、成功者であらう。

小人のする事は、殆んど「勞して、功なし。」に近い。見るべきの目は、大に見るべきである。聞くべきの耳は、大に聞くべきである。いふべきの口は、大にいふべきである。取るべきの手は、大に取るべきである。行くべきの足は、大に行くべきである。「大に」とは、「聖大に」との心である。「人間らしく」との義である人間らしく苦勞してこそ、人間らしき功がある。人間の功は、人間らしき功でなければならぬ。これをのみ、功といふ。富を成すのは、功の外である。

四の一七 與謝蕪村の壁書

◇我れに金錢なし。書畫を以て金錢とす。「與謝蕪村」

「一、我れに、妻子、眷族なし。書畫をもて、妻子、眷族とす。

一、我れに、朋友なし。書畫をもて、朋友とす。

一、我れに、金錢なし。書畫をもて、金錢とす。

一、我れに、衣服無し。書畫をもて、衣服とす。
一、我れに、家、くら、田地、山林、川等無し。書畫をもて、家、倉、田地、山林、川とす。

一、吾れ、遊所へゆかず。書畫、交易、俳諧をもて、遊所とす。
一、吾れに、師無し。古今の名書畫をもて、師とす。
一、吾れ、地獄、極樂を知らず。書畫をもて、地獄、極樂とす。
一、予、天下の法を守りて、神佛の像畫を安置すと雖も、あへて祈らず。我が心體を以て、神佛とす。

花七日、食はずとも我れ、書畫の會。
長き日を、書畫に違ひて、十二月。(與謝蕪村)

俳人としての蕪村は、芭蕉以來の第一人である。畫家として蕪村も、亦た、古今の巨匠である。勿論、句も作り、繪も畫いた。それは、句を作つたといふよりも、彼れ自身が、直ちに、句であつたのである。心、常に、花鳥風月に伴つて

これと一體を相成し、全然、句中のものであつたのである。繪を畫いたといふよりも、彼れ自身が、直ちに、繪であつたのである。渡邊華山曰く、
總身の内、髪、爪の端まで、皆、繪に相成候様仕る事にて候。
と。蕪村のその繪に於ける、亦た、斯くの如く、繪と人と、不にして、亦た、不二であつたのである。

これを忘我といつてよい。これを無我といつてもよい。
それ、無我である。豈に、復た、名利を思はんやで、彼れの念頭には、金錢もなかつた。衣服もなかつた。家、倉、田地、山林、川等もなかつた。これ、俳人としても、畫家としても、能く、大を成し得た所以である。
句を作りながら、算盤を弾く俳人に、満足な句はなり得ない。繪を畫きながら賣れ口を憂ふる畫家に、立派な繪はあり得ない。哲學を考へながら、金儲けを問題とする學者に、偉大な哲學はあり得ない。宗教を研究しながら、學校騒動に狂奔する教授、學生に、宗教の秘奥は、解らない。文章を書きながら、原稿料を貪る文士に、獨創の見はあり得ない。

四の一八 有馬涼及寢ながら見る櫻

◇天に従ふ者は昌へ、天に逆ふ者は滅ぶ。「史記」

有馬涼及は、世々、醫者である。後水尾院に徴されて、御醫となり、法印の階を賜はつた。

或る時、嵯峨の角倉氏へ往診する途中、大木の櫻を見て、欲しくなり、大分、高價なことをいふのを同家で金を借りて、買ひ取り、大勢の人夫を傭つて、我が家に運ばせた。

さて、庭に横たへが、植ゑる餘地がない。人々、困り果てゝゐると、涼及が、聲をかけて、

『よいわさ、その儘にして置けよ。寢ながら見る櫻にしやう。』とばかり、洒然としてゐた。

三度炊く、飯さへ硬し、軟かし。思ふまいには、ならぬ世の中。「古歌」

乃で、主人は、細君に叱言をいふ。細君は、女中に叱言をいふ。番頭は、手代が、思ふ儘にならないことを不平に思ひ、番頭は、丁稚が、思ふ儘にならないことを怒る。横着な手合は、他人が、思ふ儘にならないことを不満として、

「眞當に、情の強い奴だ。」など、腹を立て、中には又た、天氣が、思ふ儘にならないことを癪に障つて、天道の悪口をいふ向きもある。

何故、思ふ儘にならないだらう？ 思ふ儘にしやうとするから、思ふ儘にならない。思ふ儘にしやうとしなければ、萬事、萬物、その現に在るが如くに在つて

直ぐ、思ふ儘になつてゐるのである。植ゑられない櫻を、強ひて植ゑやうとすれば、思ふ儘にならぬ嘆がある。植ゑられないものは、植ゑられないものとして、その儘に横へて置けば「寢ながら見る櫻」として、優に、目を娛ませることが出来る。これ、思ふ儘になつてゐるのである。

思つても見よ。自分の體さへも、思ふ儘にならぬではないか。況んや人をや、

物をや、であらう。

所詮は「我れ」が悪い。我意を張り、私案を用ひて、自然に逆ひ、無理から、人を、物を、思ふ儘にしやうとする。無理は、通らない。乃で「思ふ儘ならぬ。」の嘆聲があるのである。人間、無我になれば、思ふ儘にならないものは、一つもないことになる。

四の一九 涼及百貫の茶碗

◇意を物に寓せば、尤物と雖も、病ひとならず。「蘇東坡」

右の涼及は、茶事を好んだ。人から、價百貫の茶碗を贈られた事を、北村季吟が聞いて、或る日、涼及を訪ねて行つた。先づ、様々の物語をし、例の茶を喫して後ち、季吟は、

「御秘藏の品ではござらうが、彼のお茶碗、是非、拜見致したいと。所望した。

涼及は、

「今、茶を點て、差し上げたのが、乃はち、それでござる。」と答へた。流石の季吟も、茫然自失、いふ所を知らなかつた。

世間の道具好きは、十中の八九迄、道具を娛しまないで、却つて、道具に苦しんでゐる。桐の箱に納め、錦の袋に入れて、倉の奥へ仕舞ひ込み、目にし、手にするものは、年に一度か二度位のもの。鼠の音にも、肝を冷し、火事の半鐘にも、心を消す。或る夜、窺かに、泥坊が忍び入つて、まんまと奪ひ去りでもすると、「さあ大變！」頭痛鉢巻きの半病人になるのでは、樂しむ爲めの道具か、苦しむ爲めの道具か、わけが解らない。世間の道具好きは、大部分、これである。といふのが、道具に囚はれてゐるのである。娛しむ爲めの道具ならば、手近に置いて、精々、愛翫するがよい。女中が、誤まつて壊すも知れぬ。けれど、娛しむ爲めの道具である。どこ迄も、娛しむ心を徹底させて、決して、驚きも嘆きもしない、といふので、眞に道具を娛しむのである。道具に囚はれない者、獨り、

この事に堪へる。

道具に囚はれ、道具の爲めに、一喜一憂するやうならば、最初から、道具などを持たない方がよい。

四の二〇 五神通の眼を抉る

◇五色は、人をして、目、盲せしむ。「老子」

或る人、久しく、山へ入つて、仙人の術を學び、終に、五神通を得た。一たびその天眼を開くと、地中に埋れてゐる金銀、珠玉、その他の寶が、立地に見透される、といふのである。

玉様は、その噂を耳にせられて、

「その男を使つて、何卒、寶を掘り出したいものだ。就いては、その者が、他國へ去らないやうに、引き留めて置け。」と、臣下の者にいひつけられた。

すると、一人の馬鹿家來、そのお言葉を聞きも敢へず、早速、仙人の所へ行つて、その兩眼を抉り取り、玉様へ差し上げて、

「斯うして置けば、逃げ出す心配はありますまい、御安心なされませ。」といふ。

玉様は、呆れ果て、

「予が、彼の者を引き留め置けといつたのは、地中の寶を見透させる爲めぢや。

何程、仙人でも、眼がなくては、仕方があるまい。其方は、無法なことをする男

ぢや。」と立腹された。

何程、仙人でも、眼がなくては物は、見えない。況んや、仙人ならぬ者をや、である。

人は、物に執着し、物に心を取られることによつて、盲になり、聾になり、啞になり、蹙になり、種々様々の不具になる。老子は、五色は、人をして、目、盲せしめ、五音は、人をして、耳、聾せしむ。とあり、大學に、

心、こゝに在らざれば、視れども見えず、聞けども聞えず。とあるのは、結局、同じ事——執着の弊をいつたのである。その例には、黄金の光に、目が眩んで、物の道理の解らなくなる、盲議員もあれば、三味線の音に、耳を奪はれて、親の異見の聞えなくなる、聾息子もある。利害の打算に、口を箝せられて、物のいへなくなる、啞學者もあれば、長い物に巻かれて、足腰の立たなくなる、變政治家もある。

四の二一 不死の家なし

◇水流れて、常に満たす。火盛んにして、久しく燃えず。「罪業應報經」

「昔時、一老母あり、唯だ一子の、病ひを得て、命終るに遇ひ、屍を塚間に停めて、哀戚すること極まりなし。吾れ、一子を以て、老に備ふ。今や、吾れを捨て、死す、當に、命を一處に併すべし、と。食はず、飲まざること、既に四五日なり。

佛、これを慰れみて、塚間に詣り、老母に告ぐらく、何を以て、塚間に在るや。老母、答へて曰く、吾が一子、我れを捨て、死す。之れを愛するの情重くして、共に一處に死せんと欲するなり。佛、言く、子をして、更に活かしめんと欲するや、否や。母、大に喜びて曰く、實に然り、世尊。佛言く、宜しく、不死の家より、好香火を索め來るべし。我れ、子をして更生せしめん。

是に於て、老母、行きて香を索む。人を見れば、先づ問ひて曰く、汝が家、前に、死者ありや、否や。人、答へて曰く、祖先以來、皆、死して過ぎ去る、と。斯くして、數十家を経るも、敢へて、香を得る能はず。

更に、佛の所に還りて曰く、遍ねく、行きて香を求むるも、不死の家、あることなし。是を以て、空しく歸る。佛言く、天地開闢よりこのかた、生ける者、死せざるはなし。又た何を迷ひてか、子に隨ひて死せんとはするや、と。老母、便はち、無常の理を解悟して、道に入る。

X

X

X

佛教の無常觀は、人を悲觀的、厭世的にするものではなくて、却つて、樂天的樂天的にするものである。爲めに、悲觀的、厭世的になる者があるならば、それは、無常の事實に對する、その態度が悪いのである。無常の已むべからざるを知りながら、尙ほ且つ、常住ならんことを欲するが爲めに、悲觀的、厭世的になるのである。常住の希望は、無常の事實によつて、裏切られる。乃はち、悲觀的となり、厭世的となる。一旦、世の無常を知つた上は、常住の願ひを一棄し去つて無常に逆はず、この身、この命を、無常の儘に打ち任せて、復た我執なく、復た私智なく、

聊か、化に乗じて、盡くるに歸し、彼の天命を樂しんで、復た、奚ぞ疑はん
「陶淵明」

といふやうな心持ちになるならば、こんな暢氣なことはない。これ、樂觀的樂天的なるの徹底したものである。常住の希望の混じた樂觀的、樂天的は、無常の事實によつて、忽ち、粉碎されてしまふ。何ものにも粉碎されず、死生、窮通、すべての場合を通じて動かない

のは、たゞ無常の事實に立脚する所の樂觀的、樂天的である。佛教、決して、厭世教ではない。却つて、これ、極度の樂天教である

四の二三 謙信兄三郎を討つ

◇暴虎、憑河、死して悔いなき者は、吾れ、與せず。必らずや、事に臨んで懼れ、謀ごとを好んで成さん者なり。「孔子」

上杉謙信は、幼名を猪松といつた。天文十六年正月、年十八、元服して、名を平三景虎と改め、椽尾の城に兵を擧げた。異腹の兄三郎を逐うて、自ら、取つて代らうとしたのである。

果然、三郎が、攻めて來た。景虎は、一戦の下に、これを撃ち退け、進んで、柿崎の下濱に陣した。三郎は、懲りすまに、再び、攻めて來た。景虎は、又復、これを撃ち破り、北ぐるを追うて、米山の麓迄來ると、

『眠氣が催して來た。一寢入りして、追撃しやう。』といつて、人の止めるのも聽かず、傍らの民家へ入ると、直ぐ、高軒を掻き出した。

『折角の機會を失ふとは……』と、味方一同、口々に嘆き合つた。

稍やあつて、景虎は、跳ね起きざま、

『今頃、敵は、山を三分の一位る、向ふへ越えたであらう。さあ、追撃ぢや。』といふと等しく、馬に打ち乗り、法螺の貝を吹き立てさせて、全軍に令し、龜破坂から、勢ひ猛に落しかけて、大勝を博した。

味方の宇佐美駿河守定行は、つくづく、感心して、

『山を追ひ登れば、自然、敵を笠に受けることになつて、不利益極まる。大將は敵が、下り坂になるのを待つて、上から撃ち下さうと、故意と、空寢入りをされたのぢや。その御深慮は、老臣等の、遠く、及ぶ所ではない。』と、左右の士に語つたとか。

獅子や虎が、人間に獲られるのは、勇が足りないのではない。智を缺くからで

ある。暴虎憑河の勇が、何にならう？

四の二三 床しい大學者

◇危難は、人間の試金石である。「フレツチャー」

新井白石は、困頓流離、食ふや食はずの間に學問をして、遂に、一代の大學者大政治家となり、六代將軍家宣に重用せられた人である。堀田家を去る時など、餘財としては青銅六百、白米三升に過ぎなかつたが、それでも、意氣は盛んなもので、

『何、急に餓死することもあるまい。』と、淺草邊に家を借りて、日夜、學事に勉めたといふ。

その頃の事とか、谷某といふが、

『其許は、第一、出身が宜しくない。加に、世に用ひられぬ人に從いてをられる

ので、大層、お出来ではあるが、出世が遅いかと思ふ。今の中に、師を代へられた方がよくはないか知らず。」と注意した。白石は、當時、木下順庵に學んでゐた然るに、時の將軍綱吉は、専ら、林信篤に信任した。谷某の意は、順庵を去つて林家に就け、といふに在つたのである。

白石は、たゞ黙々として聞いてゐるが、再三再四、勧められると、

『私の爲めを思はれてのお言葉と承はる。けれど、その實、私の爲めには宜しくない。孔門の士は、如何でござる？ 師の遇、不遇を理由に、去就を決するといふことであつたら、あの人たちは、何を苦しんで、陳蔡の間に從ひ、師と艱難を共にしませうや。凡そ、人間には、死を以て報いるべき者が、三つござる。父と師と君と。私は、最早、父を失ひ、又た、君もない。今の私が、死を致すべきものは、たゞ、師のみでござる。』威儀を正し、毅然として答へた。谷某は、内心愧怍として、重ねては、口を開かなかつたとか。

人は、貧富、貴賤によつて、心の動搖しないのを貴しとする。如何なる境遇の

下に在つても、夷然として、平生の態度を失はず、顔色、舉動、の一定不變なるに於て、その人の修養の程も窺はれ、まことに、ゆかしく思はれる。

四の二四 境遇と態度

◆貧にして、安んずる者は、富めるなり。「シエクスピア」

小人は、貧富、貴賤の境遇次第で、心を動かし態度を變へる。貧しければ諂ひ下り、富めば驕り高ぶる。貧しければ、藻掻き苦しむ、富めば、傲慢不遜に振舞ふ。如何にも淺墓である。

底干なき、淵やは騒ぐ、山川の、淺き瀬にこそ、仇浪は立て。

の古歌、成程と首肯される。彼れは、境遇の奴隷である。

貧しうして、諂ふのは、まだしもである。藻掻き苦しむのは、或ひは、他人の同情を買ふに足る。孔子の所謂る。

小人、窮すればこゝに、濫す。

で、常識を失ひ、道徳を忘れ、義理に背き、人情に悖り、甚はだしければ、君臣、父子、夫婦、兄弟、相捨て、顧みず、利に向つて走る。飢ゑたる者は、食を擇ばず。

の諺もあるが、然りとては、淺猿しい。

これに對して、白石が、貧苦徹骨の窮境に在つて、能く、守る所を失はず、不利と知りつゝ、不利の地に踏み止まり、死を致して、その師順庵に事へんとした態度は、まことに、高しとしなければならぬ。まことに、

富貴の、我れにあるは、秋風の、耳を過ぐるが如し。「吳越春秋」の概があり、坐るに、

孔子、渴を盡泉の盗水に忍び、曾參、車を勝母の間に回す。「後漢書」

といふものにも似てゐる。

抑も、這般の高義は、どこから來るか。小人が、境遇次第、心術、態度を二三にし、窮して、濫に流れるのは、何故か。畢竟、物に囚はるゝの致す所である。

心が、富貴に執着してゐるからである。人、一切の運命から超脱して、富貴も、復た、富貴ではなく、貧賤も、復た、貧賤ではない。以て、その人を煩はすに足らぬ。こゝに於てか、不動の節義があり、不變の操守がある。白石の學問、識見、才能、手腕は、然ることながら、吾等は、最も、その高義に敬服し、その超脱に嘆服する。

四の二五 半分は垢

◇猿の人真似。「日本俚諺」

女中が、皿を割つたといふので、内儀さん、大立腹、口汚く、罵り騒ぐ、亭主が、聞きかねて、「おいおい、女といふものは、今少し、優しく、綺麗に物をいふものだ。お前は言葉がぞんざいでいけない。この頃、御殿場に泊つて、朝立つとき、富士を見な

がら、でも、さても、富士は、大きなものだねえ！ といふと、宿の女中の挨拶に、はい、あんなに大きく見えましても、半分は、雪でございます、といったつげが、何と、綺麗ぢやないか。お前も、ちと、氣をつけたがいよ。』とたしなめる折から、近所の人が来て、
『御無事でお歸り。頂上々々！ 加に、大層お肥りですね。』といふと、女房が側から口を出して、
『何、貴方、あんなに肥つて見えましても、半分は、垢なのですよ……。』

論語の首章

學んで、時に、これを習ふ。亦た、説ばしからずや。』
の「學」の字の註に、
學の言たる、習ふなり。人性、皆善。而して、覺るに先後あり。後覺の者、必らず、先覺の爲す所に習ふ。乃ち、以て、善を明かにして、その初めに復るべし。

と見え、又た、學ぶは、「まねぶ」、即ち、真似するの心とも聞く。學問、畢竟後覺者が、先覺者に倣ふことである。先覺者に真似ることである。
であるから、真似ること、必らずしも、悪くはない。悪人は、善人を真似るべきである。愚者は、智者を真似るべきである。要は、「猿の人真似」「鸚鵡の口真似」に墮しないに在る。

猿は、よく、人を真似る。それは、形を真似るに止まつて、心を真似るには至らない。鸚鵡は、巧みに、口真似をする。それは、口先を真似る迄で、意味は、全然、解つてゐない。善人を真似るならば、その心を真似るのでなければならぬ。形たちを真似たのでは、

見かけ倒し「日本俚諺」
の譏りがあらう。智者を真似るならば、その意味を真似るのでなければならぬ。口先ばかりを真似たのでは、
論篤、これ與せば、君子者か、色莊者か。「論語」
の疑ひがあらう。

のみならず、形だけの眞似、口先ばかりの眞似は、ほんの一時の事で、永續は覺束ない。或る機會に於て、必らず、化けの皮を露はしてしまふこと、恰かも、話の内儀さんと同じことである。

四の二六 橋本左内一心の訓

◇二兎を追ふ者は一兎をも得ず。「日本俚諺」

「志を立て候には、物の筋多くなることを嫌ひ候。我が心は、一道に取極め置き申さず候はでは、戸じまりなき家の番するごとく、盗人や犬が、方々より忍び入り、迎も、我れ一人にては番は出来ぬなり。又た、家の番人は、随分、傭人も出来候得ども、心の番人は、傭人出来申さず候。さすれば、自分の心を一筋に致し、守り能くすべき事にこそ。兎角、少年の内は、人々のなす事に目がちり、心が迷ひ候て、人が詩を作れば詩、文をかけば文、武藝とても、朋友に槍を精出す

者あれば、我が今日まで習ひ居たる太刀業を止めて、槍と申す様に成り度きものにて、これは、正覺取らぬ第一の病根なり。故に、先づ、我が智識、聊にても、開き候は、篤と、我が心に計り、吾向ふ所、爲す所をさだめ、其の上にて、師につき、友に謀り、吾が及ばぬ處を補ひ、其の極め置きたる處に心を定めて、心多端に流れて、多岐亡羊の失なからんことを願はしく候。(啓發録)

二疋の兎を追ふ者は、二疋共、失つてしまふ。二つの目的を追ふ者は、二つ共外してしまふ、學問を修めるにも、技藝を習ふにも、商賣をするにも、工場を開くにも、目的を一筋にして、専心一意、その方向に歩を運べば、晩かれ、早かれ成功の地に到ることが出来る。

陽氣の發する所、金石も、亦た透る、精神一到、何事か成らざらん。とは、程伊川の語である。相違はない、抑も、目的が、多岐多端に亘るのは、何故か。慾が深過ぎるのである。他を羨むのである、自信がないのである。人言に惑はされるのである。小利巧が勝つ

である。事に不熱心なのである。

四の二七 紀伊治長節儉の誠め

◇飯と汁、木綿着物は、身を助く。その餘は我れを攻むるのみなり「二宮尊徳」

紀伊大納言治長は、平生、家臣等を戒しめて、

人馬を持ち、武器を用意し、役儀の勤めを缺くまじきには、節儉を守るに如くはなし。而して、節儉の本は、我が身の不自由を堪ふるに在り。分を知りて、虚飾せぬに在り。足るてふことを知らざれば、遂には、身をも誤まるものなり。

と示し、且つ、一首の歌を與へて、各自、自省する所あらしめた。

事足れば、足るに任せて、事足らず、足らで事足る、身こそ安けれ。

X X X

等しく、これ、節儉である。人によつて、目的が違ふ。一般には、節儉して、金を貯へ、我が身の爲めに、不時の用に充てやうとする。無常の世の中、何時、如何なる災難に出遇はうも知れぬ。人間、素より、この心がけがなくてはならぬ。

稀れには、何に使はうとのあてがあるではなく、たゞ節儉し、たゞ蓄財して、以て、愉快とする者がある。吝嗇家は、それである。貪慾家は、それである。吝嗇や、貪慾や、皆、節儉の似て非なるものである。學ぶに足らぬ。

或ひは、節儉して、費用を省き、能く、貧に安んじ得んことを欲する者もある名けて、清貧の士といふ。諺に、

貧の盗み。

といふけれど、事實、貧故に盗む者は少なくて、多くは、奢らんが爲め、贅澤をせんが爲めに盗むのである。節儉して、費用を省くに耐へる者、獨り、清貧に安んずることが出来る。

仁人ば、節儉して、費用を省き、省き得た所を擧げて、困窮の人を救ふ。これ

用を節して、人を愛す。「孔子」

といふもので、節儉の最高目的、最高理想は、こゝに在るのでなければならぬ。

昔の武人は、他日の軍用に備ふる爲めに、節儉した。今の人は、世の爲め、人の爲めといふことを、一部の目的として、節儉するやうにありたい。

目的が、何れに在るにしても、節儉するには、不自由を忍ばなければならぬ。不自由を忍ぶといへば、大層、困難なことのやうに思はれるが、たゞ、何事も、「必要」といふを限度として、それ以上を望まない、といふ迄である。必要が充たされば、不自由といひ條、實は、不自由でも何でもない。些少の用意と決心とがあれば、忍び得て、餘りがあらう。何の難きか、これあらんや、である。

□節儉の要は、少許の、利益に注意せんよりは、寧ろ、少許の、費用に注意するに如かず。

ベ
ー
コ
ン

四の二八 島津義久とその愛女

◇白銀も、黄金も玉も、何かせん、優れる寶、子にしかめやも。「山上億良」

久しく、海南に雄視した島津義久も、天下の大勢には抗しかねて、天正十五年春、豊臣秀吉に降伏し、愛女を納れて、人質とした。後ち、上洛して、秀吉に謁し、いざ歸國となると、哀別の情、殊に、痛切なるものあり。乃はち、一首の歌を詠じて、細川藤孝に贈つた。

二世とは、契らぬものを、親と子の、別れの袖の、哀れをも知れ。
藤孝は、以て、秀吉に示した。秀吉は、父子の心中を思ひやつて、
「道理ぢや。」と、涙くましい心持ちになり、その人質を返すことにした。

「子寶」といふ。我が子を、掌中の珠と慈くしむのは、なべての親心である。

否、子實どころではない。掌中の珠どころではない。親は、身に代へ、命に代へて我が子を劬はり、慈くしむ。

而も、これは、人間のみの事ではなく、鳥や獸も、亦た、同断である。

鳥や獸、その他、諸ろの動物が、我が子を愛するのは、本能の然らしむる所である。目的、理由の意識なくして、而も、目的、理由に適ふ行爲の能力、これを本能といふ。動物は「何の爲め」といふでもなく、「何故」といふでもなくして、たゞ愛し、たゞ慈くしむ。

人が、その子を愛するの、一應、本能と見てよい。たゞ、人には、理智がある。無目的、無理由に、行動することは、すべての場合に於て、その不可能とする所、子を愛するにも、目的、理由の意識がある。この點の區別はある。而も子を愛するの際、その行爲の中核に立つものは、他動物同様、やはり、本能である。目的、理由の意識を動機として、子を愛するわけではない。

因つて思ふに、儒教に所謂誠とは、亦た、本能の謂ひではあるまいか。誠には、目的、理由の意識がある。これを理由に、強ひて、本能と區別するならば、

誠は、少くも、本能的のものである。「思はずして中り、勉めずして得し(中庸)るものは、本能の事ではないか。未だ、子を養ふことを學びて、而る後ち、嫁する者あらざるなり。」(大學)尙ほ且つ、子を養ひ得て餘りがあるのは、それが、殆んど、本能であるからではないか。

嘗つて、本能主義を唱へた者がある。吾等も、以上の意味に於て、本能主義を唱へたい。親は、本能的に、その子を愛する。子は、本能的に、その親に孝養すべきである。臣は、本能的に、その君に敬事すべきである。これ、誠である。

四の二九 無一物を求む

◇諸法の自性は、不可得なり。夢に欲を行ひて、悉皆、虛無なるが如し。「寶積經」

車が、坂道に行き艱んでると、それを見た愚人、

「押してやらうか。」と、殊勝なことをいふ。車の主は、

「あり難う！ 何卒、願ひます。」

「よし、押してやるぞ……否、待て。お禮は、何を寄越すね？」

「お禮といつて、何分、途中のことですから、持合せがありませんので……」

「ぢや、何も呉れないのだね？」

「えい、無一物ですから……」

「無一物。……ふむ、然うか。」といふと、兩の腕に力を罩めて、ぐんぐん、車を押し上げた。車の主は、大喜び、

「あり難う！ どうもあり難う！ お蔭で、助かりました。あり難う？」と、厚く禮を述べて、その儘、行かうとする。愚人は、目を斜いで、

「おいおい、約束のものは、何うしたのだ？ お禮を寄越されぬか。」

「先刻もいふ通り、私は、無一物ですから……」と断ると、愚人は、大に、急ぎ込んで、

「その無一物を寄越せばいいのだ。」と喚き立て、少からず、相手を手古摺らせ

た。

愚人は、無一物を求めた。而も、人の求むる所は、すべて、これ、無一物ではないか、無ではないか。

第一、この身からが、無ではないか。地、水、火、風の四大を固とし、過去の行業を縁として、姑らく、一肉塊を現じ來つたに過ぎぬ。因縁を外にして、自性はない。譬へば、棚の上の張子人形である。紙や、糊や、絲やらが、因となり、縁となつて、こゝに一個の人形がある。

生來去來。棚頭傀儡。一線断時。落落磊々。

(生死去來は、棚頭の傀儡なり。一線、断ゆる時、落落磊々。)

敢へて、一線の断ゆるを待たぬ。形の迷へばこそ、人形といへ、人といへ、紙糊、絲や、地、水、火、風やに目をつけよ。因縁に目をつけよ。どこに、人がある？ どこに、人形がある？ 全然、無である。空に過ぎぬ。

人身、既に、然りである。況んや、諸他の萬物をやで、天地の間、一物の、自

性あるはなく、すべてが、因縁の所生である。即ち、無である。空である。稱して、諸法無我といふ。

諸法無常である。従つて、諸行無常である。因縁の所生に過ぎない萬物は、到底、不變のものではなく、生、住、壞、滅の經路によつて、遂には、その形を失ふ。これ亦た、無である、空である。

人間、何ものぞ？ 空無の身を以て、空無の物を求め、而も、飽くことを知らないもの、これが、人間である。斯くの如くにして、自ら苦しむ、斯くの如くにして、人を苦しめ、憎み、憎まれ、怨み、怨まれ、怒り、怒られ、打ち、打たれる。末は、何になることか。たゞ智者のみ、諸法皆空の理を悟つて、心、動かざること、泰山の如く、能く、涅槃寂靜の地に遊ぶことが出来る。

世間、種々の法は、一切、皆、幻ろしの如し。若し、能く、是くの如く知らば、その心、動く所なし。華嚴の一句、以て、證するに足る。

四の三〇 利根か鈍根か

◇利根の人は、妙旨妙し。鈍根に妙旨あり。「澤庵和尚」

利根の人は、妙旨妙し。鈍根に妙旨あり。利根の人は、疾く走り行き過ぐるを鈍根の人は、漸々に、其理を盡す。利根の人は、よく、前言を記す。之を説くと雖も、妙解妙し。鈍根の人は、多言にわたらずして、一句一言の上に於て、久しく之を止めて、思惟する故に、利根の人よりも、却て、妙解を得るものなり。山に入り、菓を拾ひ、茸を採る。茸多きを心にかけて走る人は、却て、これを得ず走りすぎたる跡を認めて、却て、多きを得るものなり。多きを思ふものは、多からず、妙きを捨てざるものは、多きに至ること、萬事にわたるによつてなり。

(澤庵和尚)

x x x

利根の人は、一を聞いて、十を知る。師から授けられ、書に見える程の事は、直ちに了解して、特に、考慮を費さない。少しも、苦心を須ひない。甚はだ結構ではあるが、その結構の内にこそ、不結構があるのである。

といふのが、その人、如何に利根であるにもせよ、考慮を費さず、苦心を須ひずして、知り得る所は、何れ、事物の表面に過ぎない。浅近な、ほんの一通りの道理に過ぎない。宗教の本質とか、人生の意義とかいふやうな、玄の玄なる大真理に至つては、區々の利根の、能く及ぶ所ではない。たゞ、これ、久しきに亘つて、慘澹たる苦心を重ね、然る後ち、一旦、豁然として、頓悟し、味解し得べきものである。

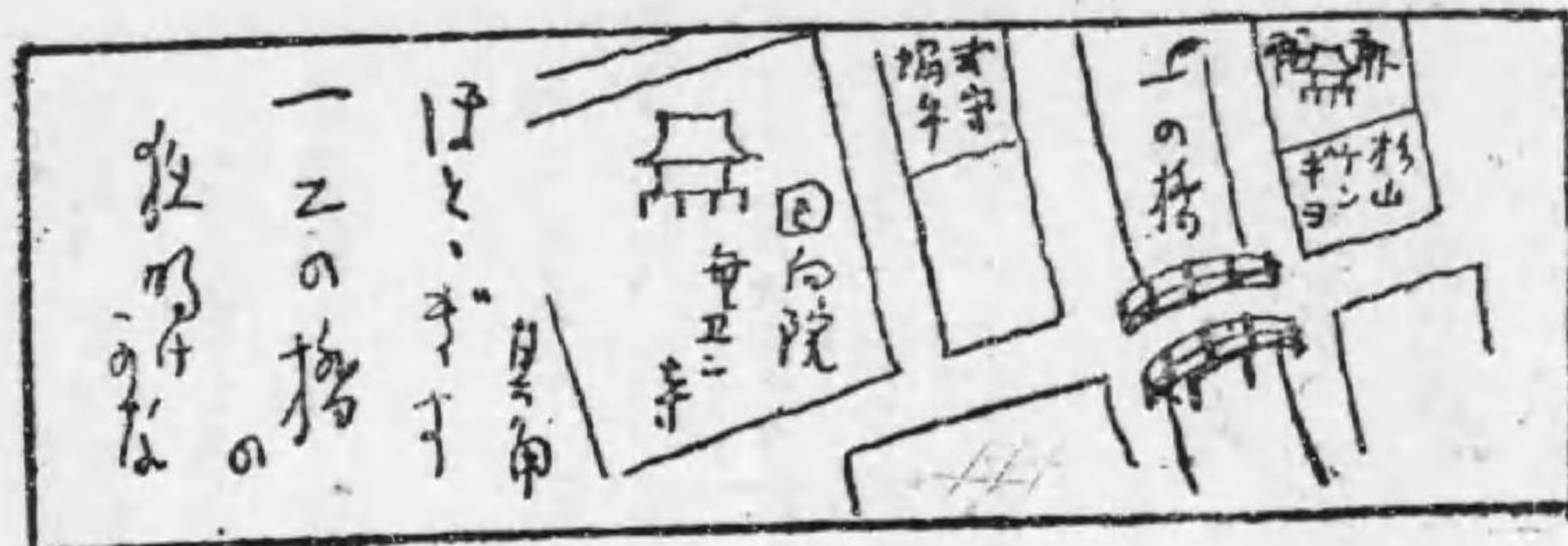
然るに、久しきに亘つて、慘澹たる苦心を重ねるのは、鈍根の人の事である。故に曰く、「利根の人は、妙旨尠し。鈍根に妙旨あり。」と。

五の一大内義隆の辭世

◇討つ者も、討たる者も、諸共に、如露亦如電、應作如是觀。「大内義隆」

周防の大内義隆は、元龜、天正の英雄中、最も、文學のある人であつた。疲弊の極、京都を逃げ出した公家などが多く、身を寄せた所から、自然、その感化を受けたのであらう。逆臣陶晴賢の爲めに、長門の大寧寺で弑される時、討つ人も、討たる人も、諸共に、如露亦如電、應作如是觀。

の辭世があつた。平生、心を佛道に寄せ、その道の造詣も、稍や、深いものがあつたのである。



果然、その晴賢も、忽ち、毛利元就の攻むる所となり、
何を惜しみ、何を恨みん。素よりも、この有様の、定まれる身は。
の悲歌一首、敢へなくも滅亡した。

世の小人が、眼を皿にし、足を棒にして、東奔西走、寧日のない風でゐるのは
要するに、利の爲めである。鵜が、魚を漁る如く、蛇が、蛙を漁る如く、利を漁
つて、役々汲々たるのである。

彼れも、利を漁り、此れも、利を漁り、天下を擧げて、利を漁れば、利と利と
相衝突し、人と人と、相争ふに至るのは、當然の成行である。これを生存競争と
いふ。

學者に聞くと、この生存競争こそ、社會進化の原因であるさうな。
生存競争が、社會進化の原因ならば、これ、必らずしも、詛ふべきではない。
人が、争利に汲々たるのは、單に、その人一人の爲めではなくて、又た、社會の
爲めである。人類の爲めである。寧ろ、慶祝すべきに屬する。

が、吾等の見る所、生存競争のみが、社會進化の原因ではない。古今の聖人、
君子、東西の英雄、偉人は、身を以て、天下の重きに任じ、人類の爲めに、活動
した人たちである。彼れは、利己を旨とし、此れは、利他を貴ぶ。社會の進化が
この人に負ふの大なるは、いふ迄もない。生存競争をのみ、社會進化の原因とす
るのは、一知半解の説である。

生存競争、決して、社會進化の唯一原因ではない。世人のすべてが、その争利
を廢して、世の爲め、人の爲め、犠牲的行爲を勵むやうになるならば、社會の進
化は、今一段、目覺しいものがあるでらう。

それは左に右、人命の果敢なさは、まことに「如露亦如電」である。勝つ者、
も、忽ち死に、敗ける者も、忽ち死ぬ。勝つに、何程の幸福があらう？ 光榮の
日は、至つて短い。敗けるに、何程の遺憾があらう？ 一日早く、死ぬに過ぎぬ
斯くの如くにして、利を争ふのは、無意味に近い。孔子曰く、

君子は、争ふ所なし。
と。利を争ふのは、運命を知らない小人の事である。

五の二 老僧の接木

◇死して後ち已む。「論語」

或る時、三代將軍家光が、谷中邊りで、鷹狩りを催し、徒歩で、こゝ彼處を見物した末に、思はず、或る眞言の寺へ立ち寄ると、最早、八十にも近い老僧が、切りに、接木をしてゐた。供が遅れて、側には、たゞ二三人だけがついてゐたので、老僧は、そんな大した客人とも知らず、その儘、背ろ向きになつてゐるのを家光は、

「おい、坊主！」と呼びかけ、

「何をするのぢや？」と尋ねた。老僧は、はしたなく、

「接木するのよ。」と答へた。家光は、笑ひながら、更に、

「お前の年では、今、接木したとて、その木の大きくなる迄の命が知れぬ。無用

ではないか。」

「お前は、誰れぢや？ 心ない事をいふ人ぢやな。よく思ふがよい。今、斯うして接いで置けば、後住の代になつて、何の木も、大きく育つ。すれば、林も茂り寺も奥深くなるわけぢや。愚僧は、寺の爲めを思つてする。何も、愚僧一代限りの事ではないわさ。」

老僧のこの言葉に、家光は、感心して、

「成程、然う聞けば、道理ぢやと。領づいた。」

所へ、供の者が、追々、やつて來た。葵の紋のついた品なども、多く集まつた。老僧は、初めて、それと知つて、大きに恐縮し、奥へ逃げ込んだ。家光は、それを呼び出して、物などを取らせた。

人物の價値は、平生の心がくる所が、自分一人に在るか、天下、後世に在るかによつて、決定される。偉大なる人物とは、巨萬の財産を造り上げた人の謂ひではない。將た、大臣、大將になり得た人の謂ひではない。それ等の人にして、徒

づらに、家門の大なるを誇り、身の榮華を極むるに止まるならば、以て、大人物とするに足らぬ。ソクラテスは、富の故に、大人物であつたのではない。孔子は嘗つて、大夫の官に在つたが爲めに、大人物であつたのではない。二人の、大人物たる所以は、天下、後世を念として、復た、一身、一家を顧みなかつたに在る彼の身家を事とする人々の如きは、到底、哀れむべき小人物である。

曾子曰く、

士は、以て、弘毅ならざるべからず。任、重くして、道、遠し。仁、以て、己れが任と爲す。亦た、重からずや。死して後ち已む。亦た、遠からずや。と。亦た、大人物の事である。

五の三 臆病者の川越え

◇勇の中には、安全がある。「エマーソン」

或る臆病者が、友人四五人と一緒に、町へ遊びに行く途中、渡船場まで来ると

「これは困つた。」と當惑顔をする。

「何うしたい？」

「俺は、船が嫌ひでね。」

「大丈夫だよ。」

「でも、落ちたら大變だ。命があるまい。」

「いゝよ、俺が助けてやるよ。」

「否、いけない。俺の體を船へ縛りつけて呉れ。」といふ。友だちは、可笑しさ半分、太い繩を持つて来て、いんぐん、縛りつけると、船は、難なく、向ふ岸へ着く。

乃で、友だちが、繩を解きにかゝると、臆病者は、その手を押へて、

「一寸、待つて呉れ。」

「何故々々々？」

「斯うして、俺を縛つた儘で、船ごと、吊つて行つて貰ひたいね。」

「戲言ぢやない。そんな事が出来るものか。」と笑ふと、此方は、至つて眞面目な

もの、

「然し、君、歸途にも、こんなに固く縛れるかね？」

油断が、大敵であることに、論はない。諺に、

用心は、臆病にせよ。

とは、道理な教訓である。が、これは又た、臆病過ぎる。過ぎたる臆病は、油断と同様、災難を招くの原因となる。虎列刺などの流行る時、臆病者程、感染し易いと聞く。

勇の中には、安全あり。——多少の危険を顧みず、敢然として決行するのが、却つて、安全の道である。

□希望は、何事も困難ならずと思考し、失望は、困難に勝つ能はずと告ぐ。

ア イ ワ ツ ツ

五の四 聖書の愛敵訓

◇天に在ます爾曹の父の完全が如く、爾曹も、完全すべし。「基督」

「爾の隣を愛しみて其の敵を憾むべしと言へること有るは、爾曹が聞きし所なり然れども、我れ、なんぢらに告げん。爾曹の敵を愛しみて、爾曹を誣ふ者を祝し、爾曹を憎む者を善視し、虐遇め、迫害るものの爲めに祈禱せよ。如此するは、天に在ます爾曹の父の子とならん爲めなり。夫れ、天の父は、其の日を善き者にも悪しき者にも照し、雨を義しき者にも、義しからざる者にも降らせ玉へり。爾曹、おのれを愛するは、何の報償かあらん。税吏も、然せざらんや。安否を兄弟にのみ問はんより、何の過れたる事かあらん。税吏も、然せざらんや。是の故に、天に在ます爾曹の父の完全が如く、爾曹も、完全すべし。」

X X X

味方を愛するさへ、難かしい。敵を愛せよ——「爾曹の敵を愛しみ、爾曹を詛ふ者を祝し、爾曹を憎む者を善視し、虐遇め、迫害るものの爲めに祈禱せよ。」といふなどは、少々、無理な注文ではあるまいか。抑も、敵とは何か。我れがあるから、彼れがある。我れに屬するを味方とし、彼れに屬するを敵とする。敵は「我れ」が、造り出すのである。我れがなければ敵もない。

我れとは何か。人間、元來、無我のものである。一休和尚の歌に、

西行も、牛もおやまも、何もかも、土の化けたる、いなり街道。

とある如く、人は、土の化けものである。地、水、火、風の寄せ細工である。因縁、四大を合成して、一身がある。「我れ」とは、因縁の異名に過ぎぬ。因縁はある、四大はある。而も、我れはない。畢竟じて、人間は、無我のものである。が、人を空じて、土を殘し、無我と稱して、四大を認めるのは、まだ、徹底した見方ではある。我々の、目して以て、四大とし、萬物とする所は、たゞ、事物の假相に過ぎぬ、更に、實相を徹見して、その、眞如たり、法性たるを了知すれ

ば、四大もなく、萬物もなく、すべてが、無である、眞如は、眞空である。これを有とするのは、心が、然かするのである。

五の五 橋本左内の篤行

◇徳は、香氣の如し、之を碎けば、益々香し。「ペーコン」

橋本左内は越前福井の藩士であつたが、曾て、大阪の名醫緒方洪庵の塾に學んだ事がある、後年、勤王黨の志士として、天下に、雷名を傳へた程の人であるから塾中でも異彩あつた、自然、師弟の間にも推重せられて居た、然るに左内は、時々、深夜に外出することがあつた、それを知つた同じ塾生共は、左内が遊里にでも行くのであらうと思つて、それとなく擲擲して見るけれど、左内は黙つて笑つて居るのみである、一同は益々怪しからぬと、針小棒大に噂して居ると、いつしか洪庵の耳にもこの噂が知れた、で、洪庵はある者をして、實證を探らしむべく左内に尾行せしめた。それとも知らぬ、左内は天満橋の下まで来て、大勢の乞

食の群へ歩み寄るので、尾行者は呆れて、物蔭からその様子を眺めて居ると、左内は平然として、乞食の寝て居る中へ割り入りて、徐ろに診察し始め、之に、薬を與へて居る有様であつた。

洪庵その報告を聴ひて、そゞろに感じ入つて、他の塾生一同に向ひ「汝等も少しく、左内の、心掛けを學ぶべし」と戒めた。左内の品行に邪推を逞しうした塾生共は、餘りの事に只、平身低頭するのみであつたとか。

X X X

左内の異彩ある行動は、斯くして一層、四邊の人を感じしめた、この篤行ある彼なればこそ、他日、天下の志士として、雷名を千歳に傳ふるに至つたのである。「醫は、仁術なり」で、仁とは人を救ふ事である、だから富者も貧者も、共に救ふべきである、然し、富貴の人は何處に行くと、治療を受け得られるが、貧者は頼よつて行く處のない、哀れな者である、こうした不幸の、人々を救つた、左内の行爲は聴く者の耳にも、何んとなき氣持ちがよい。今の世の、醫者、先生に果して、こんな氣概ありや、否や。

五の六 春臺顯貴に屈せず

◇彼れは、その富を以てし、我れは、吾が仁を以てす。彼れは、その爵を以てし、我れは、吾が義を以てす。「孟子」

太宰春臺、名は純、信州飯田の人である。荻生徂徠に學び、その經術を傳へて、名を天下に轟かし、諸侯伯に至る迄、争つて、その講義を聴いた。たゞ、狷介不屈、氣に入られなければ、何人をも叱りつけ、直言して憚らぬ風であつたが爲めに、終生、人に仕へず、延享四年、著書數十種を残して死んだ。

春臺が、如何に狷介不屈であつたかに就いて、一つの逸話がある。小石川に住んだ頃、或る日、通りかゝつた西國の一諸侯が、庭内の紅梅、今を盛りに咲き匂ひ、殊には、枝ぶりの面白いのを見て、駕を駐め、近侍に命じて、その一枝を所望した。取次の者が、それを春臺に通じると、春臺は、不興顔に、

「主人秘蔵の梅、なりませぬ。」と答へさせた。大名は、承知しないで、
「大名には、大名の作法がある。一旦、所望した上は、断られて、その儘、引つ
込むわけには行かぬ。是非、申し受けたい。」と強談判に及んだ。

春臺は、

「咄、この横着者め！」と思つたのであらう、山刀を執つて出て、

「大名に、大名の作法があるなら、儒者には、儒者の作法がある。その作法は、
斯くの通り。」とばかり、自ら、その樹を伐り倒してしまつた。大名は、その剛膽
に驚いて、言葉もなく、立ち去つたとか。

自分の諸侯たることを笠に着て、他人の物を強請する——亂暴とも、横着とも
いはうやうなき仕方である。殆んど、強盗に近い。

この場合、大概の者ならば、相手に威壓せられて、唯々諾々、命を拜して後ち
ほつと、胸を撫でるであらう。狷介不屈、大名、何かあらんや、の氣概を有した
春臺なればこそ、痛快、彼れが如き態度に出ることが出来たのである。

まことに、大名、何かあらんや、である。華族、富豪、何かあらんや、高位、
高官、何かあらんや、である。世に、黄金のみが貴いのではない。人爵のみが、
貴いのではない。より以上に貴いものが、数多ある。道徳は、如何？ 正義は、
如何？ 人格は、如何？ 理想は、如何？ 天と大を競ふ宇宙観は、如何？ 海
と深きを争ふ人生観は、如何？ 哲學は、如何？ 宗教は、如何？ 繪を畫き、
句を作るやうな技倆と雖も、その貴さは、黄金に優り、人爵に超える。彼れは、
彼れの有する所を以て、威勢張るであらう。我れは、宜しく、我れの有する所を
以て、然うした俗富者、俗華族、俗大官を卑しむべきである。些か、頭を下げる
必要はない。彼等の無理を通すには當らぬ。

但し、孔子の語にも、

張や欲。焉んそ、剛を得ん。

とあつて、人間、慾があつては、春臺の藝當は覺束ない。恐れずして、いふべ
きをいひ、憚らずして、爲すべきを爲し得るのは、たゞ、無我、無慾の人の事
である。

五の七 山内一豊の妻

◇有徳なる婦人は、夫の王冠なり。「聖書」

山内一豊が、初めて、織田信長に仕へた頃、東國第一の駿馬とのことで、江州安土へ賣りに來た者がある。成程、良い馬には相違ないが、値段も、滅法界に高い。それに辟易して、織田家の士中、誰れ一人、手を出す者がなく、賣り人は、空しく、馬を率ゐて歸らうとした。

當時、猪六衛門といつてゐた一豊は、家へ戻ると、

「あ、世界に、貧程、辛いものはない。奉公初めに、あつばれ、あの馬に乗つて、お館へも出やうものを……」と、思ひ餘つたげに、獨語をした。妻は、聞き答めて、仔細を問ひ、

「して、お値段は、如何程でござりまする？」と質した。

「黄金十兩といふのぢや。」

「然やうでござりまするか。」と、妻は、頷づいて、

「それ程迄に思し召すなら、その馬、お求めなされませ。料は、妾が、差し上げまする。」といつて、鏡臺の底から、十兩の金を取り出し、

「では、賣り人の歸りませぬ中……」と促がした。

一豊は、瞭然として、

「年來の貧乏に、苦しい事のみ多かつたが、其方は、斯うした金があるとも知らせず、さてさて、心強いではないか。然し、今、あの馬が手に入らうとは、夢のやうぢや。」と、且つ喜び、且つ怨んだ。

すると、妻は、

「仰せ、御道理に存じまする。實は、妾が、此方へ嫁りまする折、父は、この金を、この鏡の下へ入れて、「御身に遣はす。但し、普通の事に使つてはならぬ。夫の一大事といふ時に、これを出して、用立てるやう。」と、堅く、戒しめました。貧乏は、世の常でござりまする。一大事とは申されませぬ。それ故、今日迄は